
薔薇獄少女

亜麻音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇獄少女

【Nコード】

N4957X

【作者名】

亜麻音

【あらすじ】

突如歌舞伎町に現れた
つれざわしんら おくひらすいう おくひらそうる
連沢新羅奥平翠羽奥平蒼琉とある事件をきっかけに、万事屋メンバーは彼女等が真選組に所属していると知る。

だが彼女等は…。

“プロローグ”

―外は、とてもどんよりとした天気

―灰色の雲は、

手を伸ばせば触れられそうなくらいの厚い雲―

ハッ……ハッ…

なんで……？

こんな……。

どう……して―？

―ある“者”は血に染められた屍…屍屍屍…

屍の海の真ん中で佇む―

辺りを見回しても、何処を見ても、屍の海は続く…。

何が…あつたの…？

皆…
どうし…て動か…ないの？

ガクツと膝から崩れ落ち
これは夢じゃないの？と
頭を抱える―

―誰が…
こ…んなことを

酷す…ぎる―

どうし…て 私だけが…残ってるの？

殺……し…たい。

色々な喜怒哀楽の感情が頭のなかを廻る―

……えっ

あれ…？

なんで喜・楽？

私、なんで喜んでるの？
なんで楽しんでるの？

こんなに…憎くて憎くて
今すぐ殺したいくらい…
憎いはず…なのに…？

自分の…中で、この状況をこの現実（今）を
愉しんでい…る自分が居るかのよう―

あっ…そっかこういうのを

“ 狂ってる ” って
いうのか―

そっか
私狂ってるんだ―

次第に口はどんどん横に
開いていき…
ついにはハハハ…ハハ…と笑いだす―

するとさっきまで
いなかったはずの前方に人影が見えた。
屍を我が物顔で踏み付けながらこちらに近づいて来るのが見える―

そこには…
女が一人…

そして
異様なほどの笑顔を向ける

アナタハ…

ワタシ…と同じ…。

同…じ…？

ケイヤク…：シマシヨウ…ワタシト…

契約―？

ソウ ソウスレバ

アナタハ…。

“プロフィール”（前書き）

少し修正しました。

“プロフィール”

↳プロフィール↳

（オリキャラ）と

（ローゼンメイデン）

※ローゼンメイデンの説明は本文にて出て来ます。

―連沢 新羅―

（つれざわしんら）

身長…164, 7?

年齢…19歳

特徴…肩より約6?ほど伸ばしたグレー色の
ストレートヘア。目の色は黒とごく普通。

真選組隊長服を着用しているが、ズボンではなく、太もものちよい
上までの黒いスカートに

黒のピンヒールブーツ。

腰には刀剣が刺さっている

―奥平翠羽―

（おくひらすいう）

身長…161, 8?

年齢…16歳

特徴…髪は

腰まで伸ばした

茶色のクルクルツイントール。右目が碧色。左目が赤のオッドアイ。
新羅と同じ服装。腰には刀剣が刺さっている

―奥平蒼琉―

（おくひらそうる）

身長…160，8？

年齢…16歳

特徴…青色のショートヘアで右目が赤色。左目が碧色のオッドアイ。
浴衣を少し改造し動きやすいように工夫している。

黒いピンヒールブーツ

クナイをいくつか持ち歩いている。

浴衣の色は、青と濃い紫を掛け合わせたもの―。

翠羽の双子の妹。

真選組とは全くの無関係。

女ってたまに何考えてるか分からなくなる（前書き）

グダグダのガダッガダ小説になるかと思いますが
どうぞ

お手柔らかに

お願いします

では

オープンっ！（^^）！

女ってたまに何考えてるか分からなくなる

*

―時は秋――

夏の暑中が終わり、
少し肌寒くなってきた頃合い―多くの人々が季節の
変わり目を感じ衣更えの支度をしている―。

紅葉で色鮮やかに染まる
木々達を、よそに
今日も歌舞伎町は、
人・天人で溢れ返っている

―いつもと変わらぬ平凡な生活が一変するなんて
誰も予想つかないまま―

「あー疲れるぜ…なんで初っ端から定春の散歩? ? てか何このシチュエーション!!」

主人公としてありえねーだろっ! 普通、主人公といえば海賊船に乗って「海賊王に俺はなるっ!!」とか、

「真実はいつも一おつ!!」とか「かーめーはーめ…」

「「は」なんて言わせねえーよ!!」

てかなんで他のアニメの名台詞言ってんだよっ!!」

見た目はぱっとしないがツツコミが取り柄の新八。外が寒いせいか口からは

白い息が出ている

「そうネっ! こんなアニメ出方考えるほうが負けネ。他のアニメの台詞言うほどこのアニメは甘くないアル

「まだまだだネ」。

「お前も他のアニメ引っ張ってきてんじゃねえーかよっ!」

そんな会話を聞きながら、のんきにあくびをする定春はこのこ歩いている。

すると――

「ワンワンワンっ！ワン！」

「！」「なんだ定春、
イイメス犬でも見つけたのかっ！」

定春の鳴く方向に銀時は目を向ける……
「……………」？

……………？つて！！え……………」

「つま……………さか」

二度見する銀時。

「どっとうしたんですか！銀さんっ！」
「天パっ！何かあったアルか！」

銀時の額に汗が垂れる――

「あれ…はまっま…さかの

今日っ…て…

ジャンプの発売日じゃねえかよおおー！」

「そっちかよっ！！」

新八と神楽はがくつとずっこける。

「いきなりシリアスモード突入！かと思ったらそういうことかよ。何紛らわしい行動とってんだよ！

てか良くこっからジャンプの表紙みえるよなっ！！此処から約25？はあるぞ！！それと定春急に止まん。お前が止まると後ろの人に迷惑かんだよ！」

振り返ると、約15人弱の人等が冷ややかな目でこちらを見ている

とりあえず頭を何度も下げて謝り、道を譲った―

あっ！言い忘れてた！新八がツツコミを言い終えるとゼーハアゼーハアと

息をあげた―にしても

よく一つも噛まないでツツこめる。それはツツコミと眼鏡の長い付き合いのせいかな。(作者あああっ?)

「新八いー!! お前は眼鏡!! 新八だがやれば出来る奴だと思ってたぞー! だからおめえーらは、定春の散歩を続けてろー!!」 「それ褒めてんのか

けなされてんのかわかんねえんだけど! って何自分だけ楽しようとしてえんだよ僕だってお通ちゃんのNEWシングルの買い!」 「駄眼鏡少し黙るヨロシ! いつまでも乳臭いコト語っ点じゃねーヨ。

だからお前はいつまでたっても新八なんだよ! なんだよ「八」って! 私「八」より「一」派ネ」

「神楽ちゃん: さっきから言ってるけど他のアニメ引っ張り出すの辞めにしよ。てか僕が新一kに適うとも思ってるの?」 「思う訳ねえーだろ! ぶっ殺すぞ!」

「神楽ちゃん: 毒舌」

「まっあんな甘党ヤロー」

ほっといてさっさと帰るあるヨ。あっ帰ったら「渡る世間は鬼しかいねえコノヤロー」見なくちゃいけない」 アル! 定春早く帰ろう! 「わんっ!」

すると神楽は定春にちょこんと乗リスタスタと行ってしまった。

「: 駄目だ。さっきから色んなテレビのタイトルやなんやかんや出し過ぎてる...」

泉ピ○子Sすみません...」

新八はこちらに向かって深く頭を下げた。

「さて僕も行こう……………」

……

…

あれ？」

前進した身体を数歩後ろに戻す―

新八は少し疑問を抱く。

「銀さんの入ったコンビニ毎日毎日客が多いのに今日はやけに人いないな…てか人ほぼぜ…」

「新八…！間違った駄眼鏡ー！！早くするアルヨ！」
ブンブン手を振る神楽―

「……………」

「僕の名前は新八じゃわー！！！！」―新八は大声でそう発しながら神楽達の元へ走っていく。新八の声は雲一つのない晴天の空に余韻を残し
そのまま静かに消えていった―

――――

新八が疑問を抱いてたなか銀時は満面の微笑みでコンビニの中にはいる―。

「ジャンプージャンプと…………いい年こいてジャンプなんて…とか言ってる奴

あいつらぜってえジャンプの良さわかつちやいねえー「少年ジャンプ」とか言っちゃってるけど実際少年以上におじさん向けもあるからね。特に「T O L O V Eる」とか

あれ何歳でも読んでも平気なやつだよ。9だの13だの年齢制限やってるから餓鬼がイっちゃってる世界に、Let's perlyしたくなるんだよ。あんなのFULL OPENにしときや餓鬼が卑猥なコト考えずに平和に暮らしていけんだよ。まっ銀さんは外見がおっさんでも心が少年だから少年！ジャンプ読んでも

大丈夫だけどねー！」

と独り言を言いながら雑誌等に目もくれずジャンプ、SQ、マガジンなどと

ずらっと並んでる前にびしっと立つ。

「ジャンプの今日の表紙はトリコ…か。悪くねえ」
ジャンプに手を伸ばすー

ーカチャっ…

何かが頭の後ろに突き付けられる。

女ってたまに何考えてるか分からなくなる(後書き)

新) ????

神) なんだよぱっつあん
何キレてるアルか?

銀) お妙にまた
ダークマター

食べさせられたんだとさ
その副作用で作者に
八つ当たりしようとしている最中らしいぜ!!

新) 変な言い掛かりは
やめろよ!!

「花より団子」とか、それ結局自分が食べたいからじゃなくて？（前書き）

今回のサブタイと本文全然関係ありません。

「花より団子」とか、それ結局自分が食べたいからじゃなくて？

「おーおー多串くんか。」

何君もジャンプ買いにきたの？

あっ！君はマガジン派だったか。駄目だなあ君はまだまだアマチュアだ。てかマヨラーっていう存在だけでもうアマチュアだよ。

いやアマチュア以下だよねもうヘタレヤローだよね！つか鬼の副長と恐れられてる人がマヨラー！？

まるで、夜にラーメンを食べる人略してマヨラーの間違いじゃなくて？

片手にジャンプを持ち、手の空いてるもう片方の手で耳をほじくりながら振り返る。

「俺はジャンプでもマガジン派でもないー。」

「盗み屋派だ…！」

そこには銀時に拳銃を向ける男が二人いたー「えっ…」尋常じゃない汗がダラダラと頬をつたうー辺りを見ると、コンビニの店員4人、高校生くらいの女子3人、スーツ姿の男2人、お婆さん1人、に黒づくめの男たちが拳銃を突き付け座らせているーそれに

タバコを加えグラサンを

かけたおじさん―

金のなさそうなそのおじさんはホームレス生活でもしていそうないやしているひとがそこにはいた―

見た目どおりまるで駄目なおっさん……略してマダ……ってただの長谷川さんじゃねえかよっ！！

な―にやってんだあの

おっさん！！てか何ラフにパンツ一丁で拳銃突き付けられてんだよ。何顔赤らしめてんの！

Mだよあの人Mだよ―

声に出したいが、この状況で言うわけにもいかず

心の奥深くでツッコむ

ツッコむツッコむ！！

「おい何してる―さっさとそこに座れ」

銃を突き付けられながら人質が集う場所に座らせられる―皆とてもビクビク怯えている―隣のパン一のヤローを抜いてわ…。

（ツチなんだってんだよ！なんでこんな展開っ！初っ端から定春の散歩させられるわ

変な黒づくめのやつらに銃向けられてフラグは立つわ主人公としてかっこいいところ何もみせてねえ―じゃねえかよ！）

：

「あつ銀さんじゃん。こんなところで何してんの？」

「何してんのってどう考えても銃突き付けられて今にも頭ぶち抜かれそうな感じだろ見てわかんねえーのかバッキヤロー！
てか長谷川さん何その格好？なんでパンー？

黒づくめの男たちに聞かれないように

コソコソ話で長谷川さんに問うー

「いやぁーネクロゴンド

からここまで帰ってくるのに7日かかったんだけど

パンツびしょ濡れでさぁ…それに帰ってくる途中鯨の大群に襲われてパンツ破かれちゃったしコンビニで飯のやつ買おうと思ってここ寄ったんだけど結果こういうハメになっちゃったんだぁ」

「あーだからパンツそんなに破けてんだね。まあもう半分フルチン状態だけどさ…。軀喰われなかった分

有り難く思ったほうが良いよ。

ホントホント」

見ると色がハゲたトランクス＋半分モザイク状態の下半身がそこにはいた

「まあな後、ネクロゴンドに行ってきたお土産

「まる子も大好きになる

お菓子」略してマダオあるんだけど…食べる？」

「結局お菓子の名前もマダオなんかいっ」

「味覚絶品！ネクロゴンドマミューダパオ味だけど…」

「味の問題じゃねえーんだよ！！良く見てみるこの状況！！こんな状態で呑気に食う暇あるなら今頃この重苦しい牢獄コンビニから抜け出してるわ？

てかんな得体の知れない

食い物食えるわけねえだろう！」

「おいそこ静かにしろっ！殺されたいのか」

―カチャツカチャ

銀時と長谷川さんに向けて黒づくめの男達が一斉に銃を向ける―

「ちよっ：ちよっと

待って下さいよ先輩方―俺達撃っても何も得することないですって？あっ！でも

隣の人（長谷川さんに）に

撃ったら

ホームレスになった時の

生き方の知恵など得ること出来ますよ☆〃

「ちよっ銀さんっ！！何俺を盾にさせようとしてんの！：そんなだつたらこっちの銀髪の人撃ったほうが得ですよ！撃った瞬間、コイン出て来たり、アイスフラワーやファイアーフラワーとか出て来て技使えたり、スター出て来たら、スーパースイヤジンよりも無敵になれますよ★〃」

「おいおい長谷川さーん！あんた何言っちゃってんの撃たれてコイン出て来るなんて聞いたことないんですけど！何パッケンフラワーに喰われて財布？だけじゃなく頭の中のコインまで空っぽになっちゃった？」「そういう銀さんこそ何その頭！塩でも振り掛けたの？だからそんなに白いの？

あっ！もしかして

アイスフラワーに凍結されちゃったの？成る程！

どうりで人よりも遥かに

煌めいてると思ったよ！

俺、マジ髪に神がいるかと思ったよ！！」

「何ソレダジャレ！寒いよ寒いよ！あんたは、死ぬまで末永く「ダンボールの神様」でも聞いてろ！」

「クッパに炎吹かれて

髪チリチリ＋タマ無くなっちまえ」「……？

タマ無くなれってどういうことだああ！！俺は、死んでもタマとタマで闘わせられたり、ボックスドライバーに変えられたりするの
はもう御免だああー」

アニメ・原作などを見てた人なら分かると思うが、銀時の股間はリアルワールドではあまり使いどころはない。だが股間をいじるギャグを何度も生み出すことで笑いの神様を拝むコトが出来た！そう…この銀魂（世界）は“股間”というキーワードで成り立ってい…

「るわけねえーだろ！」そんなこ汚ねえ汚物なんぞでこの世界が成り立ってるわけねえーだろ！！

確かにこのアニメは普通のアニメとは違い、餓鬼には聞かれちゃまずい台詞も多々発している。視聴者からの苦情の電話で何度打ち切りの危機にあったか記憶に残らねえほど山ほどあった。だが一人でも多くこのアニメを見ていただけるよう汗水垂らして頑張ってきた俺達の苦勞！そんな汚物ごときにとられてたまる…

亜麻音

「はいはい終了終了ー！！金玉か銀魂かう〇こか

〇〇〇か知らないけど早く先進めてくれませんか？前の前書きで「オリキャラ出て来ます！」って

宣言しちゃったのに、こんなコンビニの中で

眠気が覚めるようで覚めないようなゆるい話が終わらないといくつまでたっても先進まないんですけど！さっさとピリオド打ちちゃってくださいよ！」

「ちょっと作者ーあんだ何してくれてんの！俺今良いこと言ってたよね？最後シメようとしてたよね？俺やっとな主人公としてカッコイイとこ見せられるふ陰気…てかそういう空気だったよね？」

「私…空気読めない女なんで！」

「何“きまった”みたいな感じになってんの！何も決まってないからね！そういうやつクラスに一人か二人いるよね！俺ああいう子苦手なんだよねとか周りから言われてる系だよね」

亜麻音

「まあともかくそういう訳だから…。んじゃ後よろしく！あっ！あっと一応忠告しとくけど、くれぐれも撃たれないように♪んじゃまたねー☆」

すると作者は光の速さで飛んでいき、キラッと星が一つ光ると、何も見えなくなったー

「あー？何なんだよたくっ！あっ！

長谷川さんいたんだ」

「なんで！今までずっと

話してたじゃん！

なんで急に存在消されてんの！」

「冗談だよ冗談！

あっ！先輩方すみません…大変長くお待たせいたしましたし…」

――バン！

――外は晴天…。

中は曇天の状況のなか――

曇天の空は雲一つ晴れることもなく激しい雷雨が降り続いていた。
そこに集う者に予想したくもなかった最悪の光景を見せながら――

「花より団子」とか、それ結局自分が食べたいからじゃなくて？（後書き）

作者がキラッと光りって所は、ロケット団の奴でも思い浮かべて下さい。

後最後の曇天ってところはコンビニの中のことです。

てかコンビニの中で雨ふらねえし…とか思ってる人はそこはスルーでお願いします。

知らない人に自分の名前を呼ばれても一応100%スマイルで振り向け（前書き

今回は銀さん達はできません…

知らない人に自分の名前を呼ばれても一応100%スマイルで振り向け

「まあだいたいこういう帰ってこない日はパチンコ

行ってる日が多いけど、定春の散歩の途中だったから財布持ってたないと思うんだよね。あったとしてもジャンプ代くらいしか持ってたてない思うんだけど…」

「だったらコンビニ強盗にでも捕まってるんじゃないアルか。それかもコンビニの中で銃で撃たれて死体となっているか。」

小指を鼻の穴にいれほじくりながらそんな冗談のよいで冗談じゃないコトを言う

なぜなら今さっきコンビニの中で一つの銃声の音が鳴り響いたからだ―。

「ハハハっ冗談も対外にしてよ。神楽ちゃん」―いやだから冗談じゃないって！

もしかしたら、みんなの銀さんマジガチで屍になってるかもしれないよ！主人公ご愁傷様ってなっちゃってるかもよ！

「そういえば！この時間帯って「渡る世間は鬼しかいねえ」の再放送やってるアル。駄眼鏡リモコン取るアル！」

「だからその駄眼鏡ってやめてくんない？」
「いいからさっさと」

リモコンよこせよ。私よりろくにグッズ出てなくせに…。」

「んなっ!! それ氣にしていたのに…! てか今関係なくね?」そう言いつつ自分の隣にあったリモコンを神楽に手渡す。神楽はリモコンの電源を入れると「渡るゝ渡るゝ」と意味のわからない歌を唄いながら、チャンネルを回す―

「おーちようど

びったしネ♪」

―オープニング―

ゝてれれれれれれん

てれん てれれれれれ… てれ… 「ニュースEDOゝ

先程こちらに入ってきた情報をお伝えします…。中継が繋がっているようです。

「なんだよっ! オープニング聞けないじゃないかアル」

…では現場にいる

結野アナ! 結野アナ!

…:はい現場の結野です。先程こちらのコンビニで

強盗事件が起きました。そのあとたまたまこの

コンビニに居合わせていた客を人質に捕ったようです犯人は

「人質を返してほしくば、金を1億用意しろ」との請求を求めてきました。

数々の

警察達が説得を求めても一向に動きを見せず

手の施しようがなく、真選組への出動命令も今さっき発動された所

です。

一体この事件はどうなるのでしょうか？

そして人質は無事生きてあのコンビニから出てこれるのでしょうか？

また新しい情報が入りましたら、お伝えします。

以上　こちらからの中継でしたー：

「はい結野アナ！ありがとうございます。

くれぐれも気をつけて下さい。えーそれではまた新しい情報が入りましたらお伝えいたします」

ニュースEDOが終わると「だってそんなこと言ったってしょうがないじゃないか」と○ナリが発していた。

だがそんな名言を発している○ナリにも目もくれず、向かい側に座っている、

新八と顔を見合わせ、しばし時間が経ったー

そして新八は

ハッ！と思いだす

「まさか定春…。あの時コンビニに向かって鳴いてたのはジャンプの発売日のことを教えてたわけじゃなく…あそこに犯人がいるぞって知らせようとしてたんじゃ…」

「じゃあ…銀ちゃんは今頃…。」

「……………」。

ダッダッダッダッダッ

ボタンっ！

鍵を閉め忘れたことも気にせず
ただ：

“ 目指す場所 ” へと走る――

（銀さん…今助けに…）

（銀ちゃん…今助けに…）

二人の思いが重なった今――

救いの神は

微笑むか――

それとも――？

知らない人に自分の名前を呼ばれても一応100%スマイルで振り向け（後書き

オリキャラいつ出て来るのか自分でもわからない…。

占いのラッキーアイテムって必要なさそうで実は幸運の持ち主（前書き）

やっとのことで、オリキャラ参上っ!!

占いのラッキーアイテムって必要なさそうで実は幸運の持ち主

～inコンビニにて～

“ バーン— ”

一つの銃声が鳴る—

銀時と長谷川さんはそれぞれ死を覚悟していた—目を開ければそこには見たこともないエンジェル達が俺を連れてあの世にいくのではないかとそんなことを思いながら…。

だが心のどこかでは

（銀さんが撃たれろ—）

（長谷川さんが撃たれろ—）

と反面思っていたかも

しれない—

――両手で体を軽く摩り
撃たれた場所を探す――

……

……

……あれ？

ゆっくりと目を開け自分の 体に視線を向ける……。そして瞬きを2、3回する。両者二人共――

撃たれてなどいなかった――血が一滴も垂れておらず痛みっすら一つもなく……

彼等は、生きていた喜びを言葉や身体で表現するのではなくハァーっ……と息を垂らして喜びを表現した――

だが安心してゐる暇などない――

だったらさっきの

銃声は一体……？

たまたま

弾が入ってなかったただけか？

それとも 外れただけ？

否、ターゲットを変えたのか？

だったら誰に…？

イッイヤ…イヤア…」

「！！」 声がした方に体を向ける…

そこには…

高校生くらいの女性がもう一人の高校生に体を揺らされていた―

見るかぎりその女は

ただ体を揺らされ続けているだけで微動だにしない…

ピクリとも動かず…

身体を激しく揺らしながら大声をあげ呼び続けている声にも応答せず―

「ちよっ…先輩方…？ なっ何して…」

「あーあ可哀相にな…お前等が騒ぎもしなかったらその女は身代わりにならずに済んだのによ…。全てはあんたらの失態が招いた結果だよ…。」

今だに銃口からは灰色の煙が薄々と出ている―

女を撃った黒づくめの男は銃口に向けて、フツと息を吹き込むと灰色の煙は、サーッと静かに消えていった―

「サナっ…サナ…起きてよ死んじやいやだ……！」

「サナ」という名は多分撃たれた少女の名前だろう…。

少女の友達は必死にその娘の名前を呼び続ける…。

無駄だ…。と

分かっているながらもその娘は少しの『軌跡』を信じながら…

「…たらっ

だったらなんで…なんで俺達を撃たなかった！どうして罪のない人間を撃つ必要がある！」

―銀時は、黒づくめの男達に鋭い目をやる―

「あぁっ？お前自分が撃たれなかったただけ有り難さを営め。変わりにその女が身代わりになった…。ただそれだけだ…。」黒づくめの男は、顔は少し微笑みながら、そして呆れたかのように発する―

「というか…。あんたらが騒いだせいで外は仮装パーティー会場に変わってるぜ…。ましてや警察^{マッパ}までもがこんなに群がってるたあ俺達あこんなところで 捕まる訳にはいかねんだよ…。

どうせてめえら逃がしても被害者としてマッパに

とっ捕まえられ聴衆され…

あげく俺達は、牢獄行きだ

そうなる前に…」

カチャ―

カチャ―カチャカチャ…

「あんたらも…すぐさま

息のね止まらせてやっから安心して逝ってくれよ…

…今ならあの女とでも会えんじゃねえのか？」　クスクス…笑
いながら、黒づくめの男達は人質（銀時含め…）に向けて、銃を向
ける―

銀時は、「洞爺湖」と描かれた木刀をギュツと握りしめる…が
相手は拳銃を持っている…ましてや自分が動けばまた犠牲者がでる
ということ想定し、ただ黒づくめの男達を睨むことしか出来ずに
いた…。何もできない自分に唇を噛み締め手汗が滲むほど木刀を握
りしめたまま…

「ではでは皆…さん」

カチツ…

―引き金を引く

「未来でまた…」

会えたら…」

……

誰もが死を覚悟した…

—銀時と長谷川さんは二回目の死を覚悟して

—だが…

次は本当の死を—

「……………だ」

「あっ…？」

「死ぬのはてめえーら
だああああああ！！！！」

耳を塞ぎたくなるような声をあげたほうに視線ごと体を向ける—

そこには…

さっきまで、「サナ!」と

名前を呼び続けてた高校生があの時とは、嘘のような顔つきをしていた―

瞳孔は開き、ずっと見ていれば今にも殺されそうな顔をしていた。てかもうもはや、

鬼の形相と呼んで良いほどの―

―すると

いつのまにか何処から取り出したか知らないが

その高校生の手にはバズーカが抱えられていた―

(まさか……?この状況ってまさかのまさか……) 皆が、口に溜まっていた唾を飲む―それが合図のように

バゴオオオオオン!!

コンビニは屋根ごと吹っ飛ばされ、黒づくめの男達は皆、外に放り出された―。

銀時達は、黒づくめの男達とは逆の方向に居たため、なんとか命だけは免れた

だが

銀時等は、顎が外れたかのようにポカーン…開いた口がなかなか塞がらない…。第一何故、高校生がバズーカなんぞ危なっかしい道具

を持ってるんだ―？
というのが、
疑問だった―

一方その女は、モクモクと茶色い砂煙が出ている所をシルエットを見せながら歩いていき、砂煙から出て来る時に 姿をあらわにした。

「たくつとんだ茶番に付き合わされたです！」パンパンと服についた砂を払い落しながら

「ちょっと新羅っ！！いつまで屍、気取りしてるつもりですっ！何が「サナ」ですか！！偽名も冗談もほどにするですっ！こんな長い芝居討ってあげたんですから給料60%翠羽に渡すです！」

（えっ なっ 何…？
この娘？芝居とか言ってるけど…？サナ…？偽名？
って…まさか
……この女…）

ゆっくり首をその『サナ』という死体…に向ける…！

「……ちょっと…バズーカだけは使うなって言ったでしょ…！いくら威力が1／3だからって警察がコンビニ全壊してどうすんのよ！それに給料60%なんてあげれるわけないでしょ…」

あんたこそ冗談ほどほどにしなさい」

死体が話した…ましてやむくつと起き上がる

ーコンビニの中の人々は、（アア…アアア）と絶句した…と声が震える…

そして、すぐに立ち上がり、銀時達のすぐ横を通りすぎる…。

死体だったものが…

「全く…？今日の占いは

12位だって言うから、たまにはラッキーアイテムでも信じてみようかなと思って見てたら、『フライパン』

って書いてあったたから、お腹にしまつていたけど、まさかフライパンのおかげで命拾いするとはね…。」

スッとお腹から出すと、

さっきまでのポッコリお腹とは裏腹

とてもスタイリッシュなバランスの良い体型になったー

フライパンには、確かに、銃弾が当たった後が

はつきりと残っていた。そのフライパンを小さい円を描くようにクルクルと回しながら、今だ絶えることなく出ている砂煙をくぐり抜け、ふて腐れ顔で待っている高校生のもとへ向かう――

「貴様等…何者だ…。」

バズーカが放たれた時に熱風が黒づくめの男達をとり囲み
そのまま男達を晴天の空の下へと追いやる――

その衝撃で身体が痙攣し動けずいた男達はその二人組の高校生を下から睨みつける――

「あーそっか…。これからあんたらを
あそこ

牢獄に放り投げる最、名前も知らない人にやられちゃ
虫の居所が悪い

ものだしね…！

自己紹介しといたほうが良いかもしれないわね…」

赤と黄色のチェック柄スカートのポケットから、スツと小さな手帳を取り出し、

バツ！ と片手でその中身を男達に見せる――

「はじめまして諸君等…

つい最近、新しく『隊長』として任命された

真選組四番隊隊長

連沢新羅…っ」と

ちらっと横に視線を送る――

……

…ハァーっ」と

一つため息をついてから

「同じく『副隊長』として新しく任命された

真選組四番隊副隊長

奥平翠羽…ですう…」

言い終わるとその高校生…否、真選組四番隊隊長
連沢新羅は

「よろしくっ♪」

とニコツと威勢の良い声と満面な笑顔で

自己紹介を終えた――

占いのラッキーアイテムって必要なさそうで実は幸運の持ち主（後書き）

コンビ二篇は終わりです！

次からは、本編？らしいのが始まります♪

インスピレーションが素早く働く人ってなんか素晴らしい

「ばっ：馬鹿な！！真選組は男しかいない武装警察の集団のはずだ！！女が所属してるなど聞いたことがない！第一、女が『隊長』などに任命を任されるなど以っての外！お前達のような女がこの俺達：いやましてや攘夷志士などを捕らえられるわけなっ：グジョブウ！！」

一人の男の顔は顔面から一瞬にして地面に埋め込まれた！
その翠羽という女の足に操られるかのように――

地面はメキメキ：と痛々しく悲鳴をあげるも、翠羽はそんなことお構いなしに男の後頭部にローファアを履いた足を乗せ地面へ誘う――

「女女女女：うっざしいです。」「ヴグウっ！」さらに足に力を加え、男の後頭部が見えなくなるくらい地面に押し付ける――

「女舐めたら、怖いですから！」

フフフ：と優しく

黒い微笑みをする彼女はまさしく…サドっ！

皆がゾゾゾっと鳥肌が

立つくらいに――肌で実感した

「翠羽：ほどほどにしなさい。それ以上やったら本当に死ぬわよ。それ」

それと指差すのは地面に

押し付けられている男のことだった。

確かに、地面に押し付けられている状態なのだから

その男はまともな空気を取り入れられる訳もない。

虫の息ほどにしか

してないのは事実。

「……新羅がそこまで言うなら……少しは手加減しても良いです。」

少し力を緩めた。

だがけて、足を退けた

わけではなく、まともな空気を吸える程度に…。

「そろそろ、あの人等も来る頃じゃない？」

あの人等…？ ああ…真選組のこと…。

と、新羅の顔を見て、頷く

「ほら、もう少しの辛抱です。牢獄に入る覚悟は出来てるんでしょね…。」

黒づくめの男達に聞こえる程度に声を出す。その声は男達を脅迫するかのよう

男達の身体は今だに痙攣しているため、逃げようにも逃げられずにいた。牢獄に入る準備は万全だ。

一人除いては…。

「クククッ…俺達はてめえーらマップに捕まる訳にはいかねえんだよ…。」

「ハッ？」 声のする方に身体は動かさず、視線だけを送る。

黒づくめの男達は全員身体が痙攣していて動けずにいたかと思っていたが、

その男だけは、身体は動けずも、手首だけは動かしていた。そしてすぐ傍にあった銃を新羅へと向け：

「あばよ…」

と言に残し

二回発砲した

その一部始終を見ていた、結野アナ達も、声に出せずにその映像をテレビに映させてることしか出来なかった。

男は勝ったとも思ったのだろう。

男の額には「勝利」という文字が浮かんでいた。

だが

「無駄ですう…」

ポツリ…と呟く。

そして視線を前に戻す―。

「いっておくけど、新羅…」

「!!!!!!」

皆、またまた顎を外す…。

なんせ、新羅は明後日の方向に身体を向けながら、
フライパンを持っている
手とは逆の手で

「こんなんで、命落とすほどヤワじゃないですから！」

人差し指と中指の真ん中に二つの銃弾をしっかりと挟んでいたのだからー。

「アッアア………アッ……！」

銃を構える手が震える…。

新羅は、振り向き
間に挟めた銃弾を男に微笑みながら見せる。

そして、その銃弾をフワッとスロモーのように投げ、ガシッと素早くキャッチする。「翠羽…。」

「はいっ♪」

威勢の良い声で振り向く

「その男…。私が管理しとくから貴方はこの男に“女の恐さ”というものを思い知らせてあげなさい♪」

バチッ☆とウインクしながらとんでもないことを発した。

「アイアイサーです♪」

二人は、持ち場を交換し、翠羽はムチ、新羅はアメの使いようを分けた―

その時、

頓狂な声が、歌舞伎町に

響いた―

「御用改めである！真選組だ！」

武装警察真選組とはまさしく彼等のことを言う
：別の名幕府の犬は
今現場へと到着した。

「あっ！来たです！ニコチン中毒ー！！」ブンブンと手を振るー
満面な笑顔でー

「？誰がニコチン中毒だ！！……
ていうかお前等なんだそれ…」

「何って？」頭にクエスチョンマークを浮かばせる。

「お前の後ろの煙が出てる物体。んで連沢の踏み付けてるそのやつ。
」

「何って…」

「このコンビニを襲った」

「強盗犯どもだけど？」

声を揃えて

「何か？」と言う。

「おっお前達、まさか二人だけでこいつらをとっ捕まえたのか！」

真選組局長ゴリ…近藤勲が焦りながら問う。

「そうだけど…。何か問題でも？」

「凄いいじゃないか！お前等！問題以上に、お前等の手でこの強盗犯を捕まえるとは…！やはりお前達を隊長、副隊長に任命して良かった！」

俺の目に狂いはなかった…「あったよ！！アンタよく目擦ってよくみてみる！！なんでこいつ地面に頭

減り込んでるの！なんで

身体から煙出てるの？なんでコンビニ全壊してんの！」

一つ一つ指を差しながら、堪忍袋がキレるほど

どでかい声をあげる。

「だってこいつらムカついたんですもん！なんか女女女女…うっざ

しかったし」

「それはただてめえ自身のムシヤクシヤを晴らしたかったただけだろっ？

じゃあこのコンビニは？」

「それも翠羽がやったことです！こいつら新羅に発砲したんですよ！それがムカつかないでいられますか！だからバズーカ使って外に吹っ飛ばしてやったです！」腕を組み、鼻をフンツと鳴らす。

「お前のそういう神経を吹っ飛ばしたらどうだっ！！
てかどこからバズーカ取り出した！！！」

「いや取り出したっていいか…元々あった…的なの？」

「はっ？」

「すいません。土方さん…俺この事件が起きる前にこのコンビニにバズーカ

置いてきちゃいやした…」真選組一番隊隊長沖田総悟は土方をキレさせようと挑発した。

「おんめえは！！！！」

ピキッと血管がキレる直前に新羅は

「まあまあ…バズーカがあったからこそ人質の命が救われた…って
思考パターンをプラスに変えても良いのでは？」

と言われ、

なんとか修羅場にならずに済んだ。

総悟が小さくチツと舌打ちをしたことは誰も知らない――

「おいっ！奥平っ！てめえは後でしょっぴいてやる！

にしてもコンビニはこの有様……！！

ってことはまさかお前人質…」

「まさかっ！

私もそこまで馬鹿じゃないです！こいつらやコンビニはともかく
人質の命は全員無事ですう！」

任務は遂行した！とでも言いたいのかグッジョブサインで現した。

警察ともあろうお方が人質の命を取る失態など起こしたら幕府の犬
の恥の上塗りどころか今この場所で

彼女等の腹を斬らなくては示しがない――

そんな手間が省けた土方は「そうか…」と一言だけ告げ

コツ…コツと靴を鳴らしながら歩いていき、

全壊したコンビニ（一応）？のなかに入る前に、煙草を地面に落と
し潰した後

人質のもとに歩み寄る―

「すみません…皆さん。怖い思いをさせてしまい本当にすみ……………」

ちらっと人質が集う場所とは異なる場所に視線を向ける。

正確に言えば、人質達の集う場所のちよいと左側に視線を向ける―。

「万事屋…？」

「んあっ…？ニコチン中毒…！」

ピキッ―

「ニコチン中毒じゃねええ！」

今度は完全に血管が切れた―

ダッダッダッダッ―

ガシッ―

銀時に近寄り、胸倉を掴み無理矢理立たせる―

「おい！てめえ、こちとら今無性に虫の居所が悪いんだよ。あんまりストレス抱えさせんな？」

眉をピクピクさせながら銀時に言う。胸倉を掴む手をバツと離し、逆に銀時が土方の胸倉を掴む―

「アアっ？お前誰に物言ってるの。こっちはジャンプ買いにコンビニ寄っただけなんだよ。」

なのに何これ。

なんでこんな事件に主人公が巻き込まれてんの！！なんで危機的状況にあってんの！」

胸倉を掴む手をバツと離し、また土方は銀時の胸倉を掴み今度は壁にダンッ！と激しい音と共にぶつける！

「んなてめえのおつかい話なんぞ知らねえーよ？
いいからとっとと失せろっ！！目障りなんだよっ！」同じく、銀時
も土方の胸倉を掴み反対側の壁にぶつける――

「アンタさあ、こっちは
被害者なんだよ！れっきとした“人質”なんだよっ？もう少し扱い
良くしたらどうだ」

ガシッ――

「てめえの何処が
人質なんだよ。おめえがおだぶつしてくれるんだったらちっとは扱
い方を変えてやっても良いぜ」

「アアッ？」

「アアッ！！？」

コンビニの中でガミガミと激しく口論する二人の声ははっきりと外
に漏れていた――

「にしてもてめえらんとこのやつどういう教育させてんだよ！」

「やつ…?」

「ちょっと!! アンタたちの声外にタダ漏れしてるんだけどー! もう少しボリリューム落とせばー?」 コンビニの中に耳を塞ぎながらやってきた

新羅 そして翠羽

「そう!! やつって

この女共の事言ってるの!」

銀時は、彼女等をビシッと指差しながら言う。

「多串君っ!! 君この娘達にどんな教育させてんの!! なんでこんな女共がてめえらみてえ糞集団の隊長、副隊長に勤めてんの!! つーか武装警察に女が入ってる時点で可笑いだろう!!」

ゼーゼーと激しく

息をならす。

「それに…」

「あっ?あのさ…。」

新羅はちよつと困り顔で話し掛ける――

「此処で話すのもなんだから外そっちで話さない？」

皆頷き：「そうですね、

そうだなと言ひ

外へと歩き出す――

新羅は、歩きだす前に
人質の皆に顔を向け

「皆さんも外に出てください。この建物いつ崩れるかわかりませんし、中には怪我をしている人もいるやもしれないですから。

今四番隊が皆さんを手配してくれます。今日は本当に申し訳ありません。」

礼儀正しくお辞儀をし、

「後でまた改めて謝罪させて下さい」と言つて
歩きだす

外では、四番隊の隊士が

万全な態勢を整え、指示が出るのを待っていた。

隊士達の横を通り過ぎる最

「後はよろしく…」
と指示を出した

「はっ…ハイッ!!」 隊士達は、自分のポジションへと着く―自身の仕事を成し遂げる為に―

外に出るときさっきまで銃を向けていた男達は、真選組に取り押さえられ、パトカーに入れられていたり

マスコミに取材を受けてテンパっている真選組等など…。
外はガヤガヤと騒然な不陰気になっていた―

「おーい! こっちこっち!」

翠羽は初対面にも関わらず馴れ馴れしく呼ぶ―

「ハァー」 つと頭をボリボリかきながら二人の元へ行く

「…あれっ? 多串君は…?」

さっきまで口論していた多串…土方は何処にもいなかった。

「たぐ…?」

ああーニコチン中毒ですかー! ニコチン中毒ならマスコミに捕まっていますよ!」ホラッと

笑顔でその方向に視線を向ける。そこには報道陣の真ん中に立って取材を受けている土方がいた。

「まっあんなやついないほうが話は進むです! 気にしないー気にしない!」

手を横に振り、気にしない…と振る。

「おっ万事屋…!! お前なんでこんなところに…?」

近藤が、コンビニの中から出て来て、こちらに気づいたらしく近寄る。

「やあエネゴリくん!!」

「あっ近藤さん!!」

近藤さんもこの方とお知り合いなのですか?」

新羅は近藤に問う。

「まあな、知り合いというか腐れ縁ってやつか?」ハハハっ!…と

両手を頭の後ろに回しながら照れ臭そうに笑う―今此処に土方が居合わせていたらまた修羅場と化していただろう…。
多分…！

一方銀時は

ケツ！と耳をほじくりながら明白あからさまに言う

「へえーそうなんですか！」新羅は優しい笑顔で微笑む

「あっ…！お前等も自己紹介したらどうだ…？お前達も晴れて隊長・副隊長に任命されたんだ。名前くらい覚えてもらう義務くらいはあるだろう…？なっ万事屋！！」

肩を、パンパンと叩き、無邪気な笑顔で「なっ！」と
言う―。

「あっ…ああ…」

（もう知ってんですけど！強盗犯に教えてた時、俺もうしっちゃったし！

てかもう小説の内容のなかにモロ名前ポロリしてんじゃん）「んじやあ…私から

私は真選組四番隊隊長

連沢新羅…」

「同じく真選組四番隊副隊長

奥平翠羽

です」

「よろしく…です。」

万事屋と手を交わす―

「よろしくね…万事屋さん」「えっ―」

銀時は、啞然とする―

「そんなびっくりした顔

しないでよ！土方や近藤さん達が貴方の事そう呼んでたから呼んでみただけ…！なんか悪かったかしら？」

「あっ…いやそういうことじゃなくて…。」（今の…………。）

「フフフっ…頼もしい人！反応が鈍い人って私好きよ！」

「はっ…？」

「嘘嘘ー！

からかってみたかっただけ☆…というより私貴方の名前も知りたいんだけど…。紹介して貰いたくなって…。」

「あっ…俺は坂田銀時。」

“万事屋銀ちゃん”って所で働いている。」

「あゝだから皆万事屋って呼んでいるのね！んじゃあ…ええって…
銀時って呼んでも良いかしら？」

「ああ呼び方は別に何でも…」

「そう…じゃあ改めてよろしくね！銀時…」

「こっちこそよろしくな…」

二人は手を交わす―

？

……何かがおかしい…

………何かが…

…！

(…こいつ…！まさか…。)

銀時は何かを察知したらしく新羅の顔をジッと見つめる。

ハッ！！と新羅はそれに気づいたらしくバツ！と交わした手を無理矢理離す。

「そっ…

それにしても今日は雲一つない晴天な空よね！」
新羅は何もなかったかのように空を見上げた！。

「ああそうだな…。」

（間違いねえ…こいつ！！）

ーチャン ーサン
ーんさあん、ちゃん

銀さあああんー！

銀ちややんー！

「！！」

声のする方に目を配った

そこにはー

インスピレーションが素早く働く人ってなんか素晴らしい（後書き）

眼鏡をかけた少年 と

チャイナドレスを着た少女

とてつもない速さで

こちらに迫ってきた

が

どんな人間も皆皆生きているんだ！友達なんだ！（前書き）

早めに更新しました！

どんな人間も皆皆生きているんだ！友達なんだ！

ものすごい速さで銀時等の前に姿を現した者―。

それは―

「新八っ！神楽っ！お前等なんで此処に…！」

「ゼー…なんでって…ハ―銀さん帰って…
来ないなって思ったら…ゼエー…テレビに…映ったのが…このコ
ンビニで…それも強盗事件だっていうから…

「だから…ゼエ…私達…心配で心配で…家から飛び出して来たア
ル…！」

「

「おまえら…」

「ゲホッゲホッ…」

咳ばらいする神楽の背中を優しく撫で、片方の手を
新八の頭にポンッと乗せる――。

そして

「あんがとな…。」

銀時は二人にもう大丈夫だ…と微笑みながら告げる

神楽と新八は

ニヒヒ!! と無邪気に笑う

「銀時…。この子達は？」

新羅は、その場の空気を壊すかのように問う―

「あーこいつらは俺の…」

「家族ですっ!!」

新八は、銀時の大きな
手を頭に乗せたまま振り返り、新羅に告げる。

「そうアル!! 銀ちゃんもこんな地味で冴えない新八も私は大好き
アルっ!!」

神楽も、頬を赤く染めながら照れ臭そうに言う。

「まあっ血は繋がってねえけどよ！」

その三人は太陽の光のようにとても眩しく見えた――。

その笑顔が眩しくて――。

まるで

本当の“家族”のように

「そう……」

そんな三人を眩しく見ていた新羅は

また優しい笑顔で微笑んだ――

「って……？なんかすみません！初対面の方にこんな変なこと言うのもあれなんですけど……

なんだか僕達、“家族”

というものがどれだけ大切な事かってことを改めて分かった気がするんです！」

「改めて……？」

「えっ！

いや元々家族というものは大切なものだというのはわかっていた事なんですけど……なんだか……ねっ神楽ちゃん！」

「わっ私に振るなアル！！……んと………

とっ！とにかく！！

わっ私は銀ちゃん達が大好きアル！！／／／／

顔を梅干しのように、赤く染める神楽ー。

「プッ！神楽ちゃんそれ理由になってないよ！」

「ううっ五月蠅いアルっ！駄眼鏡！！」

「駄眼鏡って呼ばないで下さいっ！！！！」

「眼鏡ザルっ！」

「名前変えりゃ良いってもんじゃねえんだよ！」

「クスッ…」

てことは、つまりこの事件があったからこそ
貴方達の家族の絆がより一層深まった…！

って言いたいのかしら？」

新八と神楽は醜い争いをすぐにやめ

「えっいいいや…！…！」

そういう事じゃなくて？そのええつと…」

「良いのよ良いのよ！子供は単純で扱いやすい♪」

どっかの感情の鈍い人とは違ってね…」クスツと笑い、視線を銀時にちらっと向ける。

「はいはいっ！どうもすみませんね…。謝りますよ謝れば良いんだろ…。謝れば！」

銀時は鼻をほじくりながらハイハイっと言い、指についた鼻糞をプンッと飛ばす

「別に銀時って決め付けてるわけじゃないわよ♪」

「その“♪”やめてくんない？腹立つんだけどー！」

「そういえば…貴方達の名前まだ聞いてなかったわね！！よろしければ教えてくれない？」

「聞けえええええ？？？」

銀時の話をスルーした新羅は、キレられながらもまたもやスルーし、新八達に、「お願い…！」と両手を合わせ頼む。

「あつ勿論っ！！僕の名前は志村新八…って言いますよろしくお願いします！」

「

「こちらこそよろしく♪」

だが新羅は、「よろしく」と心を交じらわせるも…

何故か手を

交わせようとはしない

それを、疑問に思う銀時―

「はい（＾Ｏ＾）／

次は私アル☆

私の名前は 神楽って言うアル

この歌舞伎町（町）の

女王ネ♪

よろしくアル♪」

「ええよろしく♪」

やはり

神楽にも 手を交わらせようとしなかった。

何故――？やはりあの時は……！

「んじゃあ次は私……」

私は真選組四番隊隊長

連沢新羅

よろし……」

「お前真選組だったアルか！あのニコ中、ゴリ、サドがいる税金泥棒がいるあそこの四番隊隊長だったアルか……！」

「ええ……でも隊長に就任したのはつい三日前だけ……」

「三日前……！！！！！！」

ガシッ―

神楽は新羅の両肩をしっかり掴む。だが身長が足りないせいかな神楽は爪先立ちをし背伸びをすることで新羅の身長にちょうどたどり着くことが出来た―。

「新羅！今からでも遅くないアル！今すぐ
“万事屋銀ちゃん”に転任するアル！！」

「えっええ？」

「お前あんな男真っ盛りな集団の中に居て、息苦しいって思ったこと一つ二つ思ったことあるだろっ！！」

「えっ…と、まあ…確かに二回くらいあったか…
ウグッ…！」

両肩に力をさらに加えられ棒直状態に陥った：

「だったら今すぐエネゴリ共に退職届け出しにいつて退職金搔っ攫って持ってくるヨロシ！！！」

「神楽ちゃん：それただお金が欲しいだけじゃ……」

「神楽：ごめんなさい……」

いつのまにか神楽の手は、新羅の肩から離れていた――

「あれ？」

神楽自身も自分の手がいつ新羅の肩から離れていたか知らずにただ新羅の顔を低い位置から顔を見上げることしか出来なかった――。

ポンツと神楽の頭に手を乗せ

そしてとても

あの時の笑顔が嘘のように――とても悲哀な顔で話し始める。

「私達が、この歌舞伎町の 庶民の命を守るが為、真選組に入ったのは 言うまでもないけれど

それ依然に この真選組に入った理由も有るのよ…。」

「理由…？何アルかそれ？」

「それはまた後で教えてあげる。いずれ言うときは来るから…。」

薄く微笑んでから、

頭をポンポンツと軽く叩くと後ろに数歩さがり
神楽から離れる―

「翠羽も自己紹介しなさ…あれっ…？」

翠羽……？ 翠羽！！」

辺りをぐるぐると見回しながら声をあげる――

「此処です。此処！」 声のする方に目を向けると翠羽は
いつのまにかパトカーの
助手席の窓から顔を出していた――

「なんか今さっき此処らでひったくり事件が起きたみたいなんですよ！」

だからちよつと私達行ってくるですよ！」

「出してっ！！！」

ブオオオオオン！――

乱暴にエンジンを掛ける音が鳴り響き

もの凄い速さでスピードを出しながらUターンをし、気がつけば翠羽の乗るパトカーはありんこほどに小さくなって見えた―

「あちゃー？翠羽にも自己紹介させようとしたんだけどね…」少し苦笑いをしながら、「じゃあ…あのこの代わりに私が紹介するわね

あの娘は私と同じ

真選組四番隊副隊長

奥平翠羽

ちょっと口汚い部分もあるけど仲良くしてあげて…。

それにあの娘…

戦争孤児だから…。」

顔を俯きながら、翠羽の過去を話す―

「戦争で親を亡くしてからそれ以来、私以外の

人にあまり接しなくなっただけ…。でも

あの娘多分貴方達となら打ち解けあえるかもしれない

さつき銀時とも初対面にも関わらず、普通に対話していたしね！だから…」

「分かったネ♪

私こうみえてとてもフレンドリーアル♪すぐに翠羽とも仲良くなってみせるアル！！ねっ新八！」

「うん！僕達も翠羽さんと心通わせたいです！」

「そう！それはとても有り難いわ！あっでも一つ約束して…」

スッ…と

人差し指を唇の前に立て

「翠羽が戦争孤児だった事は貴方達以外誰にも口にして無いから、翠羽にはともかく誰にも口を滑らさないように…！」

「分かりました!!」

「新羅隊長ー!!今

翠羽副隊長から連絡が来ました! ひったくり事件を起こした犯人を捕まえたいのですが、どうやら何か面倒事が起こってるらしいです。

事が大きくなる前に…と告げたあと連絡が途絶えました。

緊急要請です。いかなさいましょう。」

一人の隊士が新羅に
遠くの方から、ひったくり事件の事々を報告する。

「分かった!今すぐそっちに向かうわ!」

隊士に告げると、フーとため息をつき、銀時らの顔を見る――

「残念だけど、そろそろ私も行かなくちゃいけないわ！私も隊長としての指命も受けてもっているんでね…。

近いうち、ゆっくりとまたお話ししよう…！今度は立ち話ではなく、ファミレスとかでね…その時は翠羽も連れていくから、改めて自己紹介させるわね…」

「ハイッ！くれぐれも

気をつけて！」神楽と新八に笑顔で手を振り、銀時の横を通り過ぎる最―

神楽や新八に聞こえない程度の声で―

「良い仲間を持ったわね…

幸せそうで何より…
でも

気をつけた方が良いわよ…

貴方を狙う…いや殺うとしている人間がまだこの街に居るかもしれないから…」

耳元で囁くその透き通るような美しい声は、

銀時に

『恐怖感』…というものを抱かせる―

「っ！！！てめえ…！！一体

「！！！！」

新羅をキッ！と鋭い眼差しで新羅を睨む―

だが新羅は

怯える様子もなくただ―

異常と言って良いほどに、笑っていた―

だが至って普通の

笑顔ではない―

いびつに

微笑むかのように――

風が吹くと、新羅の髪は
一本一本が靡く――

靡いた髪は

その怪しく笑う顔に
覆いかぶさるかのように

風が弱くなるにつれ、髪は顔からゆっくり一本一本
離れていき、また元の
位置へと戻る――

その至って正常ではなかった顔は髪が元の位置に戻ったタイミング
と同様に、

顔もごく普通の女の顔に戻っていた――。

あの時の顔がまるで
嘘だったかのように――

あの顔は 幻だったのか―？
それとも―？

ニコツと笑いながら
「さようなら♪」

そう言い、銀時等に別れを告げた―。

新羅は小走りに走りながら

隊士達の元へ急ぐ―

その途中、

ニヤリ…といびつな微笑みを浮かべながら、
独り言のように―

「やっど…」

やっと会えましたね…。

この時をどれだけ愉しみにしていたか……

貴方には想像も

つかないでしょうけどね…。」

小走りに走る足をゆっくりと止め、

銀河の果てまで続く
遠い空へ向かって

歪んだ笑顔を向けながら呟いた―。

「白夜叉……………」と。

止めた足をまた小走りに走らせながら

女は自分の任務を遂行させるために

隊長としての任命を果たすために

—自分の持ち場へと駆ける

気付いた時には、

そこには奇妙に笑う女

は既に居なく

江戸を：歌舞伎町を護らんとする 勇敢な女が

一人そこにはいた―

どんな人間も皆皆生きているんだ！友達なんだ！（後書き）

新羅はどうして銀時が白夜叉だってことを知ってたんでしょうね？

それも後ほど分かります！

真夜中、一人で歩いてちゃいけませんっ!! だからといって複数なら良いとは許

銀) なあ……。俺思っただけどさ……。

新) なんですか？

銀) この小説次話投稿すんの遅くね？

新) ……まっ…まあ…

人には色んな事情というものがありますからね！
仕方ないんじゃないですか？」

銀) その割にはアクセス数は良いってこれどういうこと！

神) いつも怠けてる作者のくせに、アクセス数は上昇って何かムカつくアル！

新) 良いことじゅないですか！どんなに作者怠けてたって裏では皆に見てもらえるよう頑張ってるんですよ！

銀) 怠け＞アクセス数……。これって新八＞メガネいけんじゃねえか？

神) それ良いアル！さすが銀ちゃんアル！！

新) てめえら…！

殺すううううう！

真夜中、一人で歩いてちゃいけませんっ！…だからといって複数なら良いとは許

―その日の真夜中

針は二回目の12時を回り

新たな日を

満月と共に迎えた―

かぐや姫でも降りて来そうな、どでかい満月の下を

二人の女は――

コツ…コツ…とピンヒールの音を鳴らしながら
暗闇を美しく奏でる―

「ハア―っ…全くう…何で翠羽達が見回りなんてやらんにゃいけな

いんですか？」

遡ること1時間前―

今日はどうも珍しく歌舞伎町内で事件が多く多発し、翠羽達はいつもの3時間は残業していた
無理に言えば、無理矢理
駆り出された！
と言っても過言ではない―。

屯所で食事を済ませた後、各自の部屋に戻り（新羅と翠羽は同部屋
―）
今日あった事件の資料を見ていた

……勿論新羅だけ…。

翠羽は…、
頬に手を当て、肘を机につけながら資料を開いてるも疲れが身体を
蝕み
カクンっ―！と
首をうならせる―。

トントントン…

「誰？」

「俺だっ！土方だ…」

ガラッー

真選組副長マヨ…土方十四郎はつれない顔で障子を開けた――

「こんな時間にどうしたの？」

「レディーの部屋に何のようです！！」

「単刀直入に言う…！

てめえら今から

見回り行って来い！」

「はっ？」

彼女達は、阿吽の呼吸かのように息ピッタリに首を右に傾げる――。

「ちよっ？

ちよっと待つです！今日の見回りは沖田のはずです！なんで私達が…」

土方は「あゝあっ！」と唸り頭を抱えるー。

「アイツまたサボりやがった…？隊士達は全員別の事件^{ヤマ}の調査で今さっき屯所を出ていった。

総悟はどっかしらで油売ってるはずだ。俺は総悟を探しに屯所を外す。

近藤さんには、何かあった時の為に屯所^{こい}に残ってもらおう！んで代わりにおめえらは歌舞伎町を見回り警護しにいけっ！」

「だからって！

こっちは今日の事件等で身体がもう悲鳴あげてるんです！私達女一同はもうまんじりと寝ないといけない時間…」

―バリッ！！

土方は指で障子を鈍い音と共に切り裂く―

「いつ何処で何時何分何秒地球が何回廻った日に俺がてめえらを女と認めたんだ？あゝあ！」

さっさとその眠たげな顔叩き起こして、歌舞伎町内とつと見回り行けっ！」

翠羽はその声で、

パッと目を覚まし

足の爪先から鳥肌がたつのを感じた。

翠羽と新羅は彼が

―鬼の副長―

と呼ばれる意味を改めて知ることとなる―。

―そして“今現在”と繋がる―。

翠羽は両手を頭の後ろで組み、
「ふぁーあ…」と悪評をする

「夜更かしは美容の大敵だったのに…！あのニコ中何も分かってないです！

っーかあのサド！！

帰ったらニコ中殺る前に

真っ先に殺してやるです！」

「翠羽：総悟は殺しても良いけど、土方は駄目よ！

総悟探しにいつてくれてるんだから！アンタが探す手間が省けたってことなのよ！礼の一つでも言ったら？」

（そ…そんな笑みで殺す…とか普通に言うアンタが1番駄目だと思うけど…。）

翠羽は苦笑いをしながら

「あ…ああそう…ですね」とつい敬語で返答する――

「に…にしても、今日は随分と綺麗な満月ですう！」

話を反らそうとするが、確かに今日は妙に

月に一度見るごく普通の
満月より、今日の満月は以上なほど赤い
紅色をしていた。

その満月から放たれている月光が彼女等を美しく飾る――。

「そういえば……。新羅貴方って……」

「伏せてっ――!!」

「えっ……ちよっ!……」

素早く翠羽の身体を地面に俯せにさせる――。

新羅も翠羽の隣で俯せ状態になる――。

……

五秒ほどたっただろうか？新羅は顔をあげる。

すると 前には

何本かのクナイが荒々しく地面に突き刺さっていた――。

「なーんだ……」

月に見取れて

勘付かないかと思った。」後方のすぐ傍から女の声が闇の中から聞こえてきた。

スツと立ち上がり隊長服に付いた砂をパンパンと叩き落としスカーフをキュツと締める――。

「相変わらず色気のない
登場ね……。」

クルッと髪を風に靡かせながら振り返り、電柱の頭についている青い髪のショートヘアの女を顎を少しあげながら見上げる――。

「久しぶりね……。」

蒼疏……。

└

真夜中、一人で歩いてちゃいけませんっ！…だからといって複数なら良いとは許

これでオリキャラ全員集合しましたね☆

○時だよっ！全員集合ー！

髪の毛って何本あるんだろう…。
(前書き)

いやーめっちゃ更新してなかった？おかげで、アクセス数がヤバスヤバスっ！！

ではどうぞ～

髪の毛って何本あるんだろう…。

「蒼琉っ!!」

「やあ翠羽っ! 久しぶりの再会だね…」

そう言った後、蝶が舞い降りるかのように電柱から地面に降りる―。

「蒼琉ー!!!!」

まるで

はしゃぐ小さな子供かの

ように『蒼琉』という少女の元へ腕を横に真っ直ぐ

伸ばしながら駆け出す―。そしてバツ! と蒼琉に抱き着く―。

「蒼琉! 会いたかったです! まさか此処に来てから4日も会えなかったとは思わなかったですう。」

翠羽は、蒼琉の小さな身体をググッ! と締め付けるように厚く抱く。
今にも骨が折れそうなくらいに…。

「そんなおおげさ過ぎだよ。たかが4日だろっ？」蒼琉は締め付けられる自分の身体に我慢っ！と言い聞かせハハハ…と笑いながら堪える！。

「でも…この四日何処に行ってたですか？」

「ちょっと用事があってね君にも一応関係のある話だよ！」

「なっなんですか！！翠羽に関係のある話って！？」

「ハハッそのうち分かるよ…。」

「だけど…。」

目つきがコロッと変わり

「君にはとても関係深い話だけどね…新羅」

翠羽に向けていた笑顔とは裏腹に新羅には

感情の一つのカケラも無い顔をスツと新羅へ向ける。

「せっかくの久々の再会だったのに何その別人のような顔！」クス
ツと肩を竦め

蒼琉にニコツと微笑み 投げ掛ける―。

「そうですよ蒼琉！せっかくの再会なのですから新羅に……」

そう言い終わる前に、翠羽の瞳から蒼琉の姿が一瞬にして消え去った―。

「えっ……………ちょ蒼…」

辺りを見回すと、蒼琉は翠羽から離れ、変わりに新羅の前方にいた。

だが

蒼琉はただ新羅の前方に立っているのではなく新羅の胸倉（隊長服のスカーフ）をグッ！と蒼琉自身の身体の近くに無理矢理寄せる――。

「まさかとは思うけど
これただいまの挨拶？」

新羅は胸倉を捕まれながらも今だ微笑む。

「そういうことにしておこうか新羅……。

話を戻すけど……。

君は此処最近にて真選組に入った。それも隊長にまで就任……。別
別にそれは君個人が決めたことだから、口を出すつもりはないけど
……」

蒼琉は、胸倉を掴む手にさらに力を加える――。

「僕達は
歌舞伎町

(このまち)に遊びに来たわけじゃない

それくらい、覚えてるよね

「ていうか

蒼琉…首が痛い…離して」

胸倉を掴む蒼琉の手首を掴み、離そうと手を左右に揺らす―。

「新羅…。僕達は……」

「蒼琉…手」

「あの方を…!!」

「手っ！」

「あの方をさ…」

ガシッ!!

「だから、離せつつってんだろぅが…」

まるで別人にでもなったかのように新羅の目つきがギロツと鋭くなり、胸倉を掴む手を無理矢理剥がす――

「言われなくてもアンタの言いたいことは嫌というほど分かる……。だけど、私達は歌舞伎町（このまち）にまだ来たばかりじゃない？…。ましてやまだ一ヶ月もたっていない。

だから……」

「ヴッ！！！」

蒼琉の腕を掴む
新羅の爪が蒼琉の腕に深く食い込む――

「もう少し様子見をしたほうが良いと思うんだけど…」

「どう思う…?」ニコツと微笑みを浮かべる―。紅い月光が当たってるせいか、新羅の微笑む顔がいつになく怖い―。

バツ！

新羅の腕から逃げ、新羅の傍から7歩ほど後ろに下がる―。掴まれていた自分の腕を見ると、傷一つ無い

白い腕を

赤黒い液体が

ツ―ツと一本の長い線を作り、やがて地面に滴る―

「言われなくても……」

計画は実行する…

コツツコツツーと川辺の近くへ行き、水面に写る月を数秒上目遣いをしてから

上空を見上げ、本物の月に目を向けるー。そして

バツ！と片手を奇妙な紅色に染まる満月にニコリ…と笑いながら手を翳すー

「もう少しし……

もう少しで…

計画が実行される…

だから…」

「新羅貴方まさか…」

「翠羽…これは僕達への指命だ……。何がなんでもあの方に……。」

その時、奇妙に照る

紅く染まる月から放たれる紅い月光を浴びる

その

三人の女は

まるで――

「それと、蒼琉……」

「何？」

「もしかしたら、私の正体ある男に知られたかもしれない…：そしたら…」

「分かってるよ……」

その時は……

殺せばいいから……」

返り血を浴びた鬼のようだった―。

髪の毛って何本あるんだろう…。(後書き)

なんか内容が変なんなってきた。ヤバス…

だるい時に勉強はかなりキツイ(前書き)

銀魂新巻買いましたー♪

まじ面白い○○○♪

だるい時に勉強はかなりキツイ

翌朝…

ここ数日は雲一つの無い
晴れ晴れとした天気が続く。

その青い空は、彼方まで続き目を細めて見ても雲という物体は
何一つ
見当たらない

秋風は 遠い山々から
落ち葉を舞かせ

次の町…次の町と過ぎ
歌舞伎町へと運ぶ―

その葉々の数枚はまた
風に煽られ、

「万事屋銀ちゃん」

と書かれた看板を通り過ぎると

また

新たな

遠い旅へと再出発をする

「暇……………」

「暇アル……………」

今日は、

晴れ晴れとした天気Ⅱ

仕事の依頼殺到！！！！

なんて夢のまた夢の話…。

現在午後2時ちょいを回った。今日は仕事の依頼が待ったくと言っている程来ない…。

外へ出て、ファミレスにでも寄り食事をしよう！……………

なんて

そんな余裕な金はないっ！！！
この頃

仕事の依頼は一日に多くて

二回っ！！！！

飯代など

家賃代へと姿形を変え何処かへと旅立つー。

他にも

定春の飯代・トイレの砂等でパーになりペット？の生活用品のほう
が人間様よりも図りしれない。

そもそも銀時等に

“ファミレス”などという

高台へと駆け上がることはまず無いー。

「にしても暇だ………。

まるで三ヶ月前のジャンプをみて

「この展開何回もみた……。確かヒロイン死ぬんだよね……。ホント泣
いたわー。」

みたいな飽き飽きしながらもジャンプを捲る

心が満たされるようで

満たされないあの感情と何か似ている……」

銀時は、ソファーに横たわりながらジャンプのコマを一つ一つ目を
落とし、ピラッ一枚捲るー。

「というか腹減ったね！」

新八一！！ピザ持ってくるヨロシっ！！」

「そんな金あるわけないでしょー！ただでさえ今月分の給料貰えるかどうか分からないんだし…。」

新八は割烹着とマスクを着用し、右手にははたきを持ち棚をパンパンと叩きながら

「銀さーん！！今月分の給料大丈夫なんでしょうねー？」と飽きられ声で言う。

「あー大丈夫大丈夫心配するな……
今月分のでめえらの給料から差し引いて俺のパフェ代に加算されるからっ！」

バツー！！！！！！

「何が大丈夫大丈夫だよっ！何差し引くって！！なんで僕達の給料がてめえのおやつに加算される訳っ！！」

新八は無理矢理ジャンプを取り上げて、銀時の顔の近くで怒鳴る――！

「まったく！耳元でうるせえーな！！仕方ねえーだろ仕事の依頼が来ねえーんだから……。俺は糖分食わねえとこの先どうなっちゃうか分かんねえんだから俺の糖分の為に給料分けてくれよ

なっ！！」

「なっ！！じゃねえーよ」糖分控えろっ！！！！そしてその金給料代としてこっちに渡せっ！！天パ馬鹿！！」

「何その天パ馬鹿って！！お前そんな変なあだ名なんて付けっからろくにフィギュアとかキーホルダー出ねえんだよ！羨ましいだらっ駄メガネちゃん！」

「駄メガネじゃねーよ！！つか今関係ねえーよ！！この元タマ無し！！」

「あゝん！！なんだ
やんのかゴラァッ！！」

「あゝあッ！！
なんですか！！！！！！」

「ちっちゃいアル……………」

神楽は小指を鼻の穴に入れほじくりながらボソツ…と吐く。

ーピンポーン

「居留守でえーすよ居留守ー。」投げやりに手をシッシツーと振り、
玄関先まで聞こえる声で口を大きく開くー。

ピンポン―

「銀さん出たほうが良いんじゃないんですか？」

「馬鹿！策士裂くとはつまりこういうことだ新八。」

一つため息を零して

「こういう時間帯はヅラが来る時間帯とちょうど一致している。どう考えてもあの玄関先に居るのはヅラしか考えられねえ」

「でも銀さん。桂さんならインターホン押しながら「銀さーん！あーそーぼ！」とか良く言うじゃないですか！それが聞こえないってことは違う人なんじゃ…」

「ヅラも毎回同じポジションで来るとは思えねえ…。まず裏の裏を読む事こそが侍への第一歩だ。覚えとけ！」 「銀さん…」

「てなわけで……新八」
ビシッと指差す――!

「玄関行ってこい!!!」

「ハッ？」

「だから玄関：行ってこいって行ってんだよ！」

「はっおまつ…アンタさつき裏の裏を読めっとか言ったよね!さつきと言ってることまるつきり反比例になってんじゃねえか!!!」

「んなのちよつと主人公として“侍”的な発言取り入れる為の策に決まってるだろっ!コンビニ篇では作者に邪魔されたからな…」

「知らねえーよ!!少しは尊敬出来るなと思ったら…」

「新八く!ゴタゴタと

口開く暇あんなら足動かせ足く!だからいつまでたっても人気投票

ミラクル８なんだヨ!!」 「てめえーらさっきから僕のコンプレックスに口叩かねえーと気が済まんのかああ!!!!」

「えっミラクル８コンプレックス気味だったの? そうかそうかだったら玄関行ってこい!!!」

「意味分かんねえーよ! コンプレックスと玄関何もイコール関係ねえけど!」

ーピンポン

「ほら新八!!」

「ほら新八!!」

銀時と神楽の声が一致する

「ッ!! ハイハイっ! 分かりました。出れば良いんでしょ出れば…」

新八は割烹着とマスクをこもこも言いながら外し、はたきを棚に置

いてから玄関に重い足取りで向かう―

途中

廊下を歩いてる最中に

「なんでいつもいつも僕が…」と口を尖らせブツブツと言いながら、
玄関へと近づく―

「ハイハイどちら様ですか！桂さんだったら僕…」

ガラッ！と引き戸を開ける

「……………あっ！」

玄関先のところに立っていた人物に思わず声を上げた。

「どうした？新八一？新聞ならすぐに断……」

玄関先に立っていた人物

それは

着物はボロボロに破け上は泥が至るところに付いており元の色が何色なのか分からないー。

髪は結ってるのか結っていないのか分からないボサボサした髪ー。

ガリガリに痩せて目には隈がいくつも出来

今にも倒れてしまいそうな貧相な顔をした

男が一人

そこには居たー

お金の使い道はよく考えろ

そのガリガリに痩せた男は静かに口を開く――

「あつ……あの……万事屋さんでいらっしやい……ますか……」

その男は多分依頼人であろう。そう心の中で確信する。

「えっあつ……はい。あつ……あのーとりあえず中にどうぞ。」

新八はその男を部屋へと招きいれ、ソファ―に座らせる……。

新八は奥の棚から少量のお菓子と湯呑みを持ってきて銀時、神楽、男の分のお茶を注ぐ。その

湯呑みを一つ一つ前のテーブルにコトツ―と置く――。

「んで……。俺達に今日は何のご用で？」 「銀さん。まず名前を……」
新八は耳元にコソツと言う

「ああ……まず名前をお聞きたいのですが……。」

「たっ…高梨…健三郎です。」

「高梨さんって名前なんですか…。んじゃあ名前も知ったことなんで今日は何のご用で…？」

（お前どんだけ依頼内容聞きてえーんだよ！！）
新八は拳に力をぐっ！と入れる―

「やっ…。」

「？」

「助けてくださいっ！！」

その男は頭をテーブルすれすれまで深く下げる！

「貴方達も

知っておられるでしょう？あの！！」「連続庶民殺人事件」…」

「……！！」

確かその事件って幕府の元で運営する人・また幕府のお偉いさんなどが狙われるのではなく、善良な一般市民だけが狙われる近頃この街に起きているあの…！」新八はその事件について

「前にテレビで見ました」と口を開く――

「そうです……………」。

そして…………私の愛する家族もその事件に巻き込まれ、皆っ！…………皆死んでしまいました…！」

男は涙をボロボロ流しながらそのぐじゃぐじゃになった顔を服の裾で拭く――

「じゃあアンタの依頼は、その家族とやらを殺った犯人に仇討ちしたい！
ってわけか…？」

銀時は湯呑みに入ったお茶を一気に飲み乾す。

「でもそうだとしたらどうして警察とかに頼まないアルか？」
神楽は片眉を少し上にあげる――

その言葉に男はビクッ！と肩を震わす――

「そっ…それが
その庶民を狙う犯人ってのが

真選組の者だと…」

「えっ…！」

三人は目を大きく見開く。

「ちょっと待つアル！いくらニコ中やゴリラがいるあの税金泥棒野郎でもそれは…」

「そうですよ！！あの人達は見かけはアレですが幕府の犬ともあるお方ですよ！そんなことは…！」

「いや…真選組局長、真選組副長などが関係しているのではなく…

どうもその隊長等などが関係しているという噂が…」

浮かぶ名前……一番最初に頭に浮かんだ名前……

(まさかっ…サド!) (沖田さんっ…)

二人は冷汗をかく―

「で……

ですがこれはれっきとした噂です! テレビではまだ犯人の特徴は確定していませんと言っています。」

「じゃあ…警察に言えねえ理由^{ワケ}は、幕府の犬共が殺ったなど口を吐けば、ただ事では済まねえ…。ましてやアンタがこの街の庶民を狙う何者かに標的にされやすくなるとの理由で俺達に頼んだ……っ」と

「お恥ずかしながら…」

「だが……こっちもビジネスだ。やすやすと人の命使ってまでその犯人^{たわけ}を探しだせとなると

代償は高けえーぞ!」

フッー

「こんなこともあろうかと」パチンっ！ー

男は指を鳴らすー

ガラッー！

押し入れから全身黒タイツをはいた男二人ほど出て来男の後ろに立つ！

「ちょっと待てー！ー！

人ん家からなんで全身黒タイツはいたやつ出てくんだよ！！此処はドラ○もんの世界じゃねえんだよ！！四次元ポケットから何でも出て来るレベルのアニメじゃねえんだよ！！！！」

新八は、全身黒タイツの男達に指をビシッと指しながら口を大きく開き言葉を吐く。

男は全身黒タイツはいた男達からジュラルミンケースを受け取る。

「まさか…」

三人は唾をゴクツと飲む――

まるで、高級品を前にして落ち着きを抑えるのに精一杯の子供のよう――

「ご苦労……」

お前達は帰れ……。頭を深く下げ、すたすたと歩き玄関の戸口を開け出ていった。

「おいしいい！！だったら最初押し入れから出て来た意味ねえじやねーかよ！庶民一般的に玄関から入って玄関から帰れえええ！！」

新八は玄関に体を向け口が裂けるほど開け言葉を投げ捨てた――

「銀さん……。どう思います？」

「ではよろしく！！」

「こちらこそっ！！」

二人は手を交じらせ何らかの契約を結んでいた――。

「ちよっと待てえええ！！僕がツツコンで空白の何秒間に何があったー！！」

その何秒間前―

そのジュラルミンケースを開けた途端、辺り一面が一瞬金色に煌めいた―。

「あ…あの…金で釣るってのはどうかと思ったのですがこれ…

1000万です…どうでしょう…?」

ガシッ―

「よろしくお願いします!」 銀時は、男の手を両手で握る―。

「こちらこそっ!」

―以上解説―

「ではよろしく願いします!! 今日之夜にまたお伺いしますので
では……」

深くお辞儀をし、
万事屋を後にした―。

「ぎっ 銀さん……………」
だっ 大丈夫なんですか…? あんな依頼受けて……………」

銀時等が食べたお菓子の袋 湯呑みを片付けながら
新八は問う―。

「大丈夫だ。それに良く見てみろこれだけの大金だ
!!
こんなチャンス滅多にねえ…。」

「でっでも…。これだけの金があるんだったら服なんていくつも買
えるはずなのに……。なのにあんなボロボロの服……。」

変なお金じゃなきゃ良いんですが……………」

ーピーンポン

「あっ！高梨さんじゃないですか…？忘れ物でもしたのかな…？？」

「ったく…。はいーい今出ます！」

ーガラッ

「なんか忘れ物…」

パチッ

パチッ…

瞬きをする――。

目が合う。

前に立っているのは高梨という男ではなかった。

黒髪ストレートな長髪をした男は腕を組み、鼻を高くして銀時の顔を見るなり

「よお……銀時久しぶりだな！」

「ヅラ……………」 かつて

攘夷戦争で共に戦った

銀時の旧友 桂小太郎

それが彼のことを言う。

コンビニの卵って意外に高くないっ!?

バタンッ!!

銀時はすぐに扉を閉じた

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン
ポン

扉を開けようと必死に攻める者と扉を必死に開けまいと抵抗する者の壮絶なバトルが玄関で繰り広げられていた。

家中には、インターホンの音が響き渡り

新八と神楽も少しずつ

苛立ちを感じてきた頃

銀時は我慢の玄関に達し

ついに

「うるせえええ!!!!」

ガラッ!と扉を乱暴に開け蹴りを一杯入れる――

「んだよ!!!!!! 何回もインターホン鳴らしやがって! てめえクレマーか!!!!!! 俺に何かクレーム付けることあんのかコノヤロー!」

「お前に……話があってきたんだ……! マブダチ……」

「てめえーとダチになった覚えはねええええ!!!!」

再び銀時の蹴りをくらい、「ヴブエ!!!!」と声を漏らす。

「ちっ…違うっ!!!! クレームでもエリザベスが居なくなったとかフミ子がふしだらとかではないっ!!!!!!
お前も知ってるだろっ……!!」

「連続庶民殺人事件」

のことを！」

「あっ……まあ……！」

それと俺にどういう接点があるんだ？」

「こんなところで立ち話もなんだ……。中に入らせてもらうぞ。ヴッ
プッ！」

鼻からドバドバ出て来る血を手で押さえながら
銀時の横を通り過ぎ

中へと入る……。廊下にはポタ……。ポタと
紅い点がちらほらと見えた。

とりあえず新八は湯呑みにお茶を注ぎ、銀時、桂の前に湯呑みをコトツと置く。

「リーダーと新八君。悪いが少し二人だけで話たいのだが…。」

桂は真剣な眼差しで新八等に言う。

「分かりました」

「分かったアル」

そう言うのと、二人は万事屋を出て何処かへ歩いていった。

「んで。俺に何の？」

「ズズッ…。んあー」

やはりお茶というのは一番上手いな…！」

微笑みながら

湯呑みを置くー

「では本題に入るとしよう

銀時、さっきも聞いたとおりお前「連続庶民殺人事件」知ってい

るな？」 「ああさっきも言ったとおりだ。」

「まさかとは思うが、変な依頼など受けもってなからうな…？」

「変な依頼？」

銀時は片眉を少し上にあげる

「ああ…。俺の部下から仕入れた確かな情報なのだが

どうやらその事件で殺られてる奴ら全員、
その依頼をしたされた者ばかりらしい…」

「したされた者…？
そいつら密売人かなんかか？」

「いや…密売人ともあろうがただの一般人らしい…

表向き…ではな」

「！」「表向きでは、ただそこらで家などを回り売り物を売り売りしてる奴らしい。

だがその中の多くはある組織に入り、何らかの陰謀を目論んで夜な夜な動き回っているらしい……。

まっ攘夷志士との関係…ましてやこの街への害を加えるような真似はしないらしいがな…

心配するな…。」

そう言い終わると、
近くにあった煎餅をひょいっと掴みバリバリツ！と音をたてながら
口に頬張る―

「んで…そいつらの陰謀って一体何なんだ…？」

「……しゃあーな。びゅかから聞いたきよとはここみやでだ……。
モグモグと

口に頬張り膨れ上がった顔を一瞬にして元の顔に戻す―。

「だが一つ疑問に思うことがあってな……。…」

「?」

「さっきも言ったとおり…

奴らはただの物売り屋…。物を売り、その得た金で家族を養って生きていく者達だ。」

「?……………」

それがどうし…?」

「だったら何故……

死ぬ必要がある…?」

「! !」

「それも物売り屋の奴だけではない。それを買った者までもだ…。もっと例えるならばスーパ―の店員とその客が次々殺されていると言ったほうが早いかな?」

「物売り屋と名を名乗りながら何か薬を売ってるってのはありえないのか」

「ああ…それは絶対無い。俺の部下が実際そこに潜入したらしいのだが、薬らしき物は一つもなかったらしい。ただの調度品などが置いてあったらしい」

本当にただの物売り屋らしいのだが…。」

腕を組みウン…。
難しい顔をする。

「まあ話はこんなところだ。お前もせいぜい気をつけろよ。お前は金の為ならどんな依頼も受け持つような軽い男だ。忠告はした…。とにかく物売り屋が依頼に来た…。もしくは物を売りに来たなどがあつたら直ぐさま断れ！貴様にまで死なれては困るからな。良いな？」

「ああ…。分かってらあ…」

そう言うと、銀時は脚の付近に置いてあつたジュラルミンケースをツラ：桂に見つからないよう足でスツと退かした―。

く30分くらい経った頃

「では、俺はそろそろ帰るとしよう…。

銀時、リーダーと眼鏡君にすまないとお伝え願う…。」

「ああ…分かった。」

「じゅあな……………」

「…………じゃない!!」

一つ言いそびれたことがあった!」

階段を下りる寸前桂は何か思い出したらしく再び銀時の前に姿を現す――

「その物売り屋が裏で何かを企てているその組織の名なんだが……………」

琲瑠袈^{べるか}

という組織らしい…」

「琲瑠袈…？組織の名というより人名みたいだな…」

「確かに…。まあもう一度だけ言う。せいぜい気をつけろ。二度目のじゃあな…」

しばらく桂の後ろ姿を見ていたが、その姿も夕日の照る方向へと消えていった。

「琲瑠袈……………ねえ…。」

そう独り言を呟く、銀時も万事屋内へと姿を消す。

誰もいなくなった万事屋内を一人歩く銀時、
それとギシ…ギシ…と軋む音をたてながら廊下を進み桂とツーマン
で話してた
部屋へと入る。

その部屋はあの時とは全く違う異様な空気が銀時の回りを漂う。

その空気を壊すかのようにその部屋へずかずかと入りジュラルミン
ケースへと近付き、ケースを開ける――

「依頼ねえ……………」

(変な依頼受けてないだろうな……?)

どうやらこの事件で殺されている奴全員その依頼をしたされた奴ばかりらしい…。

気をつけろ……。

お前にまで死なれては困るからな………)

「まさか………な。」

ジュラルミンケースをパタンと閉め

「そろそろあいつらも帰ってくる頃か……………」
願う者
仇討ちを

依頼を受けた 変わりに

大金を手にした者

それは

幸運を齎す鴉の声か

はたまた

不幸の音を鳴らす鈴虫の呼び声か！。

コンビニの卵って意外に高くないっ!?(後書き)

銀魂蓮蓬篇めっちゃ面白い≧≡≦!まじフミ子やべえーW
W

牛乳飲んだら背伸びるとか言うけどあれは嘘だからね！

その晩――

神楽・新八は7・00ぐらいに帰宅し　早めの夕ご飯を済ませ

銀時達はいつものたわいのない話をして時間を潰してる間に時刻は
10・00を過ぎた。

――ピンポン

一つのインターホンの音が万事屋内に響き渡り

銀時等はたわいのない話をすぐに切り上げ、

定春の頭をわしゃわしゃと撫で「留守を頼む…」と言うと定春も銀時等の現状を理解したらしく

「ワンッ！」と一つ鳴く。

定春に留守を任し

三人と依頼人は

万事屋銀ちゃんを後にした。歩いて10分はただだろうか？

高梨という男の後ろをついていき目的地へと足を進める。横目でちらっと見ると回りの家々の部屋の電気はぼちぼちと消え、明かりが付いている部屋はごくわずかほどこしかなかった。

四人は気を使っているのか一言も話さず暗闇の中黙々と歩き続ける――

憂一

口に出した事と言えば

「まだか…」

「あと少しです。」

それ以降、地面をザッザッ…と撫でるように歩く音がテンポ良く闇とマッチしていた。

しばらくすると

「あそこが……。」

高梨は路地の真ん中をスッと指差す――

「私の家族全員が……殺された所です……。」

話に寄れば、高梨の家族は父、母、娘6歳、兄、高梨の五人家族らしい……。だがこの事件に巻き込まれ、高梨以外全員殺された……とのこと……。

「そんな……。それも家族全員だなんて……。酷すぎる……。」

「本当アル……。この事件の犯人……。人散々殺して何が楽しいアルつ
！！人殺して強くなるとでも思っ……。」

神楽はハッ！と頭にある人物の面影を思い浮かべた。

「兄貴……………」

そう小さな声で呟く。

「…すみません皆さん……。私が仕事依頼したから
皆さんお寒い中此処まで来てくださったのにどうでもいい話してしま
って……。」

「いえいえどうでもいい話なんてとんでもありません!!」

「私達が見つけてやるアル! したらメツタ斬りにしてやるアル!
!!」

「本当……」

ありがとうございます!!」

「んで……」

その犯人とやらが出て来る目星とか付いてるのか？」

銀時は鼻をグリグリとほじくりながら高梨に聞く。

「あっはいっ…確か此处から半径4?以内で事件が多発していると聞いています。」

「半径4?だあー?てことは直径8?の中から一人振り絞って探せって言うのか?んなの」志村けんの鼻かんだティッシュを探すようなも……

「キヤアアアアアアア!?!?!」

「!?!?!?!」

突然、女の悲鳴が暗闇の中から聞こえた。その声はそう遠くはなく、すぐ近くだと四人は思い、一目散にその場所へ駆ける。

「ていうか志村けんの鼻かんだティッシュより軽く見つけたんですけどー！！！！！！」

銀時の吠え声に誰も耳を傾けず、銀時除く三人は息を少し上げながら、真っ暗闇な闇を駆ける――

勿論　銀時もだか――

一人加えてっ……

四人は死角に差し掛かる時に急ブレーキを

足底にかける――。

「なっ！…これは…。」目に止まった『現実』
という名の現実…。

暗闇の中でも良く見えた

泣き崩れている着物姿の女

そして往路には

血まみれの

上半身だけがその場所には残っていた。

ちらっと視線を女がいる場所とは反対側を見る

的中した――。

そこには血まみれの下半身が斬られた所からドクドクと赤い液体を
垂らしながら倒れていた――

「アッ…アンタ！一体何が……。」

高梨は女に震えた声で問う

「アッ……アア……私は……何もしてない……私はただ……」 一歩……一歩こちらに近寄って来る。両手を頭の脇に立てながら……。

「私は……死にたくないっ！！こんなっ……
こんなところで死に……。」

ズシャアアアアア―

女の背中から激しく血が噴き出す。

そのまま女は頭の脇に手を立てたまま顔面から地面へドサツ！と倒れ込む―。

女が倒れ込んだ背後に立っていた者は女から噴き出た血を体中に浴びた。

血で染まっけていてもそれが何者かは深く考えずともすぐに分かった。

高梨から聞いていたとおりの真選組隊長服を着用していた。

真選組制服は黒というより鮮血な朱に染められた灰色のストレートヘアーの女。あのコンビニ事件の時は、私服なのかそれとも変装であんなJKの格好をしていたのか分からないが、真選組隊長の制服を着ている姿はこれが初めてだ。

女に向けた虚ろな瞳はしばらくするとやがて銀時等へと目を向けた。

「まっ……まさ……か」

驚愕のあまり誰も

声に出さなかったが

とうとう新八が先頭切って口を開いた。

「そん……………な

どう……………して…

その刀の先からは紅黒い液が雫のように……………

ポタリ……………ポタリと

同じテンポで墮ちる…。

「新羅さんが……………」

牛乳飲んだら背伸びるとか言うけどあれは嘘だからね！（後書き）

真選組四番隊隊長

連沢新羅は

血だらけの刀を

銀時達に向け

「コンビニ以来ですね…」

優しく

でも何処か

あの時とは違った

笑みを見せながら

そう小さく口を開いた―

そしてただの『夜』

という

短い時は終わり

今宵の本当の『夜』の
幕開けとなる――

笑顔には裏と表の両方がある

「新羅さ…ん…

どうしてっ!!」

「どうして貴方がっ!!」

「私がどうかした…?」

新羅は薄い笑みでただただ銀時等に目をやる

「どうかしたって…!!」

新羅さんっ!

貴方 真選組隊長でしょ!!

警察ともあろうお方がなんで……なんで……っ

説明してくださいよ!!

新羅さ……」

一瞬

新八の周りだけに

生温い風が吹く。

新八は、自分の隣にいる人物に恐怖感を覚えゆっくりと瞳を横に流す。

「だあゝから……

私がどうかしたって聞けるの……?。

それに……」

耳元に口を近づけ
優しく囁く――

「私………あんまり自分の名前を一度に
何度もしつこく言う男

嫌いよ………」

その瞬間、新八の身に何が起きたかは銀時等にも新八自身も分からない。

ただ新八は、新羅の横で勢いよく倒れた――。

その横で倒れた新八を新羅は笑みを見せながら睨みつけ

「良い夢を……。」と言った

「新八っ！！！」

銀時は新八の元へ駆け付けようと右足を一步前に出す。

だがそれに気づいた新羅は背中を銀時等に向けていたがすぐに向きを変えた。

「てめえっ……！！！」銀時は鋭い目つきで新羅を睨みつける。

「ごめんなさい…別に新八さんを傷つけようとは思ってなかったんだけど…
つい…

でも安心して…

ただ気絶してるだけ…
直に目が覚めるわよ…」

「そういう問題じゃないアル!!!」

神楽は新羅に向け声のボリュームを上げた。

「新羅：お前何やってるアルか!!! お前はこの街：この歌舞伎町を
護る為に真選組に入っただんじやないアルか!?!? なのになんで罪の無
い人間を殺してるアルか!!!!」

「罪の無い人間……?」

「そうアル!!!」

「ハハッ…」

アハハハハハハハハハハ……!!!」 急に新羅は腹を抑えながら笑い出
す。

「なっ何がおかしいアル！」

「はーあ……」

そっかあーいくらこの街のなんでも屋でもそこまでの情報は知れ渡ってないんだあー！」

「情報？」

「知ってる？表向きでは物売り屋とかで商売しているけど、裏ではある組織に入り何らかの陰謀を企てているっていう集団……」

「いや知っててなおその男の話に乗ったか……。」

「はっ？てめえ何言ってる……」

「まだ分からないの……？
アンタの隣にいる男

琲瑠袈 の組織の一人だって言ってるの……！」

「!!!!!!!!!!」

「ぎっ…銀ちゃ…ん、琲瑠袈って何アル…か」

銀時の浴衣の裾を掴み問う神楽に対し銀時は「少し黙っている…」とだけを告げ隣にただ無言で佇んでいる高梨の方に身体を向ける。

「お前っ…本当に琲瑠袈の…」

「……………。」

「てめえ聞いてんのか!!」

「……………。」

それでも

高梨は口を開こうとはしない。ただ前だけを見つづけ銀時の方に目を向けようとしなない。

「黙ってねえーで何か言ったらどう…」

「時間の無駄でしたね……」

「!!!!」

新羅へ身体を

向けた！…が既に遅し

新羅は一瞬にして銀時等の前に立ちはだかり

「邪魔です…。」その言葉を聞いた瞬間、彼女からは殺気を感じとった。その目も人間のようではなく……

まるで

鬼のような――

そう思ってる間に

銀時と神楽は新羅からどんどん遠く離れていき

約20?ほどの所で地面に

引きずりながら止まった。

腹からは鋭い痛みが身体中を走り、その時新羅に

蹴り飛ばされた

という事に気づいた。

隣で神楽は苦しそうに
腹を抑えながら疼くまっていた。

「おいっ!! 神楽しっかりしろっ! 神楽っ!」

「ぎっ…銀ち…ゃん

新羅…は新…羅はどうし…て……………」

「神楽っ 神楽!!」 神楽もそこでプツンッ!と
電気が切れたように
意識が途絶えた。

神楽が抑えていた
腹を見ると紅黒い筋が
ツーツと出来ていた。

多分それは新羅に蹴られた時、新羅の履いていたブーツのヒール部
分が神楽の腹に運悪く刺さったのであろう。

銀時は神楽を抱き、
「少し我慢してろ……」

そう言いまた新羅の方を向く。

「やっと二人だけの空間になったわね…。琲瑠袈の将官さん……。」

「新羅を前にして、足をガクガクと震え上げている高梨
そんな事知らないばかりに新羅は高梨を冷たく殺気が発つ目つきを
し新羅とは思えない程低い声で

「アンタには色々聞きたい事があるからな……。」
そして手を伸ばす――

――が言葉を聞き

高梨はボロボロの

袖の中から

カチャツ――

拳銃の引き金を引き

バァンツ！！――

発砲したー。

「何こういうの運命って言うのかしら…?」

「!!!!」

「コンビニ事件の時もそうよ! 何発も撃発砲されるわ今も発砲されるし……。」

ハアーと一つため息を零しやれやれ…と首を左右に動かす。

この時点でお分かりだろう。新羅は銃弾をひょいっと軽く首を横に傾けかわした。彼女には銃弾が効かないのかただたんまぐれなのかは知らない。「こうも銃弾バンバンバンやられるとねえ…」

興が冷めるってモンよ…」 バシンッ!!!!

右手を刀のように器用に使い高梨の持っている

拳銃に一瞬のことで銃口をスパッ!と切り捨て地へと追いやる。

銃口がなくなった…。それはいわゆる成す術がなくなったとの同然。高梨はその銃を地面にたたき落としその場を立ち去ろうとした。

だがそんな隙を空けようとはさせない新羅は高梨の足に自分の足を駆けさせ地に誘う。俯せ状態になった高梨の手首を持ち片腕を空中に誘う。

「この空間から逃げ出せると思った…？馬鹿ね…」

高梨から新羅の顔を見ることがまず不可能。なんせ片足を高梨の首につけ、無力体制をとらせられている為。

「じゃあ…変な茶番劇が終わったことだし。そろそろ始めるとしようか。」

「…時間も無いことだから、早めに終わらせるわね。
私が今からいくつか質問をするからアンタはその質問に問われた事だけを答えればいい…ねっ簡単でしょ！」

でも…

アンタに与えられた

解答タイムは一問につき約20秒。早く答えないと……」

グググッ…。

空中へと誘われた片腕を曲がってはいけない方向に少し動かす。

「アッ！グッヴウ…！」

高梨は喘ぎ声を出す。そして高梨には今の現状は分からない。だが腕に

もの凄い痛みが走り、血液の循環が早まる。「まあ自分の腕が壊れたくなかったらグズグズしてる暇はない…。そういう事…！」

クスッと笑い、この状況を愉しんでるかのようになり、下に居る人間を人間と思わない目で見える。

「分かった？」

高梨は縦に顔を振る。

腕を元の指定地に戻す。

「…あっ！…銀時貴方も一応関係のある話だからよく耳澄ませ
ておいてね…。」

「あっ……ああ……」

「んじゃあ始めましょう！」

笑顔には裏と表の両方がある（後書き）

「それじゃあ一問目…」

「アンタは……」

……

……

したの……？」

風が吹く…。

その風は

その場にいた者に教えた

世界は不条理で
不公平だということを…。

人の質問になんでも返答できると思うなよ!!

「はっ……?」

風の囁りが新羅の質問に対し反抗した為、新羅が今何を口に出したのか分からず　ただ「はっ?」と声を漏らした。

「聞こえなかった…? これは銀時…貴方に聞いてるのよ…。

もう一度だけ言うわ……。この男になんて依頼されたの…?」

「依頼…?」

「そう…貴方は確かにこの男に何か依頼されたはずよ。それはなに…?」

契約の話?

「巻きますか?」 「巻きませんか?」 と聞かれた…? それとも人形を買…」

「てめえ何言って…」

「?…違うの?」

違うも何も新羅　が言った言葉に対し銀時は
思考回路が狂う。

（人形……？巻きますか？巻きませんか？）

「じゃあ何て依頼されたの？」

「連続庶民殺人事件」の犯人に家族が殺された……だからその犯人に仇を打つ……。そんな感じの依頼だ……。んでその事件やまの犯人とやらがおめえだったって訳だ。」

そう説明している時に高梨の肩がぴくっと反応した

「家族が殺された……？」

成る程……。」

グッ！と高梨の髪を上へ持ち顔を新羅の方に向かせた。

「アンタも考えたもんだね……。琲瑠袈の存在が表に割れないが
為に自分の家族を盾にした……か。」

「？」

「銀時…。こいつは家族なんて殺されてない…。まして殺してなんかいない…。それに

私は琲瑠袈の連中だけしか手を出していない。

多分こいつは自分の仲間が次々殺られている事は口を封じ、代わりにこいつの

家族が殺された。家族の為にその仇を討ちたいとこのことで貴方達を使った。そういうことでしょ？

高梨…さん。」

「ってあっ…。！それとさあ…二問目の質問に入るんだけどさあ…。琲瑠袈の将官さん等……

あんたら琲瑠袈が大挙し大規模なテロ活動を行っているって情報があるんだけど…」

「……！！！」

「ねえ…どうなの…？」

高梨は新羅の目を覗きこんでいるだけで口を開こうとしない。

「ああ……じゃあいいや。この話は最後の方でもう一度聞こう
としましょうか？」

本題といきましょう…。

これは私達自身に関係していることでもあるから……」

（私達自身……？）

「ねえ教えて…

貴方達はテロ活動と共に

もう一つ何か活動してるわよね…。

それは……何？」

「ヴッ……!!」

「これはタイムリミット制限あるわよ……。早く答えて。」

腕を曲がってはいけない方向へと少し動かす。

「じゃあさ……私がキーワード言うからそれに伴い言ってくれる……？」

「……ああ……知ってるさ……お前達の正体を……な」

「何……？」

とうとう高梨が口を動かす。

「お前達……、副隊長の……正体が……。」

「……」

「……副隊長…翠羽とか言ったか……。あいつは……」

「カウントダウン10秒前……9……」

「あの女…は…

人間なんかじゃな……い」

「早く……8」

「アリス…になれ…

なかった…ただ…の」

「…7……」

「ッジャンク…

（壊れた娘）」

バギッ—！！！！

鈍い音—すなわち高梨の腕は曲がってはいけない方向へと折れ曲がった—。

「アッ—アッ……」

「ごめんなさい…まだ
時間あったのにねっ…。骨逝っちゃったねアハハハ！！！」

「うああああああああ！！！！！」

高梨の叫声―

そして新羅の狂喜な声が
夜の歌舞伎町中に響き渡る。

「てんめえ…！！！」

銀時は気絶してぴくりとも動かない神楽を地面に静かに置き、高梨の元へ駆けようと体勢を整え一歩踏み出す。

が―真っ正面に佇む二人の何者かに真剣の先とクナイの先を首の筋に向けられた。

「此处は腹を括って黙って見ててくれないますか…？」

真剣を片手に持つは

真選組四番隊副隊長

奥平翠羽

「君は（神楽）その娘とあの眼鏡君の心配したほうがいいよ…。
あの男より…ね」
クナイを持つは

翠羽の妹 奥平蒼琉

「くッ！！！」

言われるがまま、銀時は高梨の元へ行く足を止め、
「わ
あつたよ…」

そう告げると同時に
二人も刃を降ろした。

「さあ……新羅はどうするんだろうね…。あの男のこと…
……。」

「へえ…

そんな余計な情報まで知ってるんだ…。てことは琲瑠袈内部でもそのことを知っていない者はいない…そういうことね……。」「ま
あ……琲瑠袈本部はあんたに聞いてもどうせそんな安々と口を割る人だとは思ってないから……。」

—チャキツ！

鞘から刀を月夜に照らしながら抜き高梨の首元に近づける

「あんたはもう用済み。

死んでいった仲間によりしく頼むわあ―。

次生まれてくる時は

道間違えるなよって：」

首元に近づけた刀の先を脈に留まらせ思いきり引き抜こうとした。

が しかし

ピピピピピ―

一つの着信音になる。

まるでこの状況を

みさからって鳴らしたかのように―。

新羅は刀を持つ手は首

元から離さず変わりの手―

高梨の折れた

ぶらんぶらんな手を解きそちら側の手で携帯を取る。

その瞬間高梨は逃げようと試みるが、相変わらず片足は高梨から

離れる気配がせず頭をしつかり踏み付け逃がさんと言わんばかりに力を加えた。

「はいー連沢です。」

「…………ええ…ええ……………わかった。
こつちも手柄は抑えた。こちらにも援護をー。」

ピッー

電源を切り 携帯をパタンと閉じ、高梨の方に目を下に向けた。

「高梨……。祝、なことにあんたら琲瑠袈のアジト私の部隊が発見したらしいわよ…。」 「!!!!!!」 内容に寄れば捕縛した

琲瑠袈のある一人の男を強制的に問い詰めたらしいのだが そしたら
すぐに洗いざらいに吐いたとのこと。

「なんだか皆お縄に着いちゃったらしいわよ…。残念ね…。私がアジトごと琲瑠袈内部全員肉塊にしようと思ったのにほんとにざあーんねん…。」

ハァーとため息を零し
眉をしたに垂らす。

「皆縄に着いちゃったからなあ。アンタだけ殺してもねえ……。うん…

非常に残念だけどあんたも牢獄入ってもらうわ！アンタも運良かったわね。腕一本だけで済んだことだし」ハハッ！と

口では笑っていたが

目は笑っていなかった…。

「まあさつき援護頼むとか先に言っちゃったし今更悔やんでも駄目か…。」

刀を首元から外し
鞘へ刀を戻す。

ヴーン
ーヴーン！

「あっ！きたきた！」

振り向くと

隊士の4、5人が車内からおりてくる。その姿を確認したあと新羅は踏み付けている足を退かせ変わりに両手で高梨を押さえた。

「隊長！！ただいま

局長らが琲瑠袈の連中を縄に着かせたとの御連絡が入りました。」

「ご苦労……。私もたった今琲瑠袈の組織の一人を取り押さえたとところ。すぐにこの男を局長の所まで。」

（今さっき…？何嘘こいてんだコイツ……。）

「それと……あそこに散らばっている死体の撤去作業も合わせてよろしく！」

「はっ！！」

隊士の二人は高梨を連行するが故高梨の腕を肩に回し車内へと連れていく。その内の三人は新羅があの時見境なく斬った女の真っ二つになった塊の撤去作業に移っている。

隊士達には20？先の銀時の姿は闇にカムフラージュされており気づかれてはいなかった。

「いつまで座ってんの？

早くこっちに……」

「！」後ろを振り向くと

いつのまにか新羅は新八を担ぎ暗い夜道を歩いていた。

「今日は迷惑をかけた。送っていくわよ……。」

暗い公道の真ん中には

不自然と車が一台明かりを照らし止まっていた。

「それに……」

まだ話したいこともあるからね……」

そう言うと、後部座席のドアに手をかけ開けると、
「どうぞ……」

と薄い笑みで車内に向かい入れる。

銀時は無言のまま、

神楽を担ぎ車内へと入っていく。その後ろに続き新羅も車内に入り、

パターン―と近所迷惑にならないように静かにドアを閉めた。

その車は

万事屋銀ちゃん宅へ

目的地へと 静かに

車を走らせた―。

人の質問になんでも返答できると思うなよ!! (後書き)

テスト終わったのでこれからなんとか投稿ジャンジャンできるようになりました!! かも…?

車の中では騒いでた方が酔いにくい

車を走らせ

約6分―

車内は 車に乗った当初から息苦しいふいんきに見回れていた。

一言も口を聞かず

後部座席に乗っている

両者互いの窓の外を

夜中で何も見えない

夜の道をじーっと

見つめていた。

聞こえるのは

車の静かなエンジン音―

両者の真ん中で肩を近づけスウー・スウーと眠る神楽と新八の寝息だけ―

「怒ってる？」

先に口を開いたのは

新羅―。

暗い夜の小路を見つめながら銀時に問う。

「……………」

「まあ連れを傷つけられたんだもの怒らないはずないわよね……………」

「……………」

またしばらくの間沈黙の時が始まる。

「……なあ」

かと思われたが

銀時は次に口を開く――。

「何？」

「奥平達は……？」

「翠羽達のこと？……さあね……もうアジトにいったんじゃない？」

「……そうか……」

「もっと違う事聞くかと思ってた……。」

「あ……？」

「気にならないの……？なんで私がテレビで報道されてまで事件を発展させたか。とか……。」

銀時は少し肩に力をいれると一気に肩の力を抜く。

「んなこと聞いたって…

俺達には何も得することなんてねえしな……。」

そんな返答に一瞬目を丸くした。

「へえ……存外この街にもそんな気の利く人もいるのね……。

じゃあさ……

これだったら気になったんじゃない……？

――契約の話

――巻きますか？

巻きませんか？

っていうこと……。」

「!!!!!!」

視線を銀時にちらっと向けると銀時はぴくっと肩を鳴らす。

「まあ……いくらなんでもあんな質問聞いたら嘸疑問湧かない人は少ないだろうね……。」

窓から視線を外し、

正面に身体を向き直すと腕と脚を組む。

「てめえ……。」

一体何がしてえ……。」

この街に……何しに来た。」

銀時も窓から視線を外し 両者ようやく
面と面を合わせた。

銀時の真剣な眼差しを
しばらく見るとニヤツ―と口を横に広げる。

スツ―と銀時の後ろを
指を差す―。

「着いたわよ―。万事屋銀ちゃん宅に……。」

「!」

後ろを振り向くと
いつのまにか

「万事屋銀ちゃん」

と書かれた看板のすぐ下の公道に 車が止まっていた。

「両方はキツイでしょ

…一人持つ…?」

「いい……。」

即答し、神楽と新八を自分の肩に担ぎ、外へ出る。

「そう……。
気をつけてね……。」

「……………」

無言のまま礼を言わず、階段を一段上がった途端

「明日の2時、
てに〜ずで待ってるわ。勿論その二人も連れてきてね……。明日全て話すわ。」

契約の話も…人形の話も…

そして

薔薇乙女

（ローゼンメイデン）のことも…」

「?…ローゼンメ…」

「翠羽と蒼琉の自己紹介を合わせてね…！」

銀時の言葉を掻き消すように言った。そして神楽へと視線を動かす。

「神楽の容態は明日になれば治ってるはずよ！なんせ夜兎だから治癒力も早いだろうしね…。」 「!!!!!!っ…てめえなんでそ…!!!!」

人差し指を唇の前にたてシートと銀時の声を消す。

「もう夜中の3時よ！でかい声出さないで！近所迷惑でしょ！

詳しい事は明日教えるから今日はこれで…

さようなら…」

笑みを零しながら

手を二往復振ると

パタン！とドアを閉め

車は真っ暗闇の行路を

進んで行きやがて姿形が見えなくなった。

「あの女…一体…」

そうぼつりと呟くと

階段を上がっていき、

銀時等も部屋の中へ入る。

「よろしいのですか…。あんな男に―契約の話などして…。」
運転手はバックミラーから新羅の顔を伺う―。

「言わざる終えないじゃない―。あんな光景見せちゃったんだし…。」

後部座席に腕、脚を組み座り黒一色に染まる

窓の外を見つめながら言う

「ですが……ローゼンメイデンはともかくまさか貴方の……。」

「冗談よして……。そこまで私もべらべら口叩く言う女じゃないわよ。」

「なら良いのですが…程度というものを知ったほうがよろしいかと……。」

「分かってる……。」

「なら何故そこまであの男に執着心を持っておられ……。」

「大物が釣れたんだよ……。」

「ほほお…大物とは？」

「あの男……」

白夜叉よ……。」

バックミラーの中に写る運転手を見ると、運転手の顔つきが変わる。

「!!!!!! 白夜叉…。」

何処にいるかと思われましたがまさかこの歌舞伎町（街）に。
では計画は……………」

「実行する……………」

必ずこの街にいるはずだから…」

「健闘を祈っております。」

「まあ…」

早くアジトに向かって…。土方に罵声浴びせられるの嫌だから…。」

「御意……………」

―異様に紅く染まる月と共に

数ある謎に満ちたまま…

今日という長い一日は

もう…

返ってほこない…。

車の中では騒いでた方が酔いにくい（後書き）

次はいきなり

てにーずに入った新羅達と銀時等の会話になります！

女の涙に男は弱い P a r t 1

「あのー……」

ええつと…？

ごっご注文…は？。」

「ええつ…とね……」

「ジャンボエビフライ定食」「スペシャルジャンボパフェ」に

「ジャンボ坦々麺」

「ジャンボステーキセット」「ジャンボクリームパスタ」「ジャン

ボカレーライス激辛味」「ジャンボポークカツ」を下さい！」

「あ……はい…」

かしこ…まりました…。」

店員は目を泳がせながら注文書に次々メニューを書いていくと、
後ずさりをするように

去っていった。

そりゃそうだろう。

銀時等が座っているテーブルの上には食べ終わった何十皿もの皿が段々積まれておりその大半が銀時と神楽によって軽々と平らげられていた。

「ホントに適当に頼んじゃったけど良いの？」

メニューリストをパタンと閉じると、目の前で皿にのつてあるタラコスパゲティ―

やらなんやらをまるで獣のように貪り食う銀時に聞く。

「ああ……！！！！じゃあんじゃあん注文ひろ……！！！！」

「ちよつと！銀さん！ジャンジャン！ってこれ

みんな新羅さんの奢りなんですよ！！自分が奢ってるみたいに言わないでくださいよ！！」

「眼鏡五月蠅いネ！

おみやえもさっさと食べるいヨロシ……！！新羅が良いって言うってんだから

そりえで良いあるじゃないアルか……！！」

ガツガツ！と

カツ丼をブラックホール状態の腹へ入れていく。

「神楽ちゃんもだよ……！！少しは遠慮ってことも考え……」

「良いわよ……！！今日は

文字通り私の奢りだし！

思う存分食して……！！」

「よしっ!! 神楽!!」

今日はいいつの奢りだ!! 食べ放題!! 食えるだけ食ってその腹が悲鳴あげるまで食いまくれ!!」

「おうネ!!」

新八の注意を余所に二人の猛獣は再び皿の上の物に目掛けて口を開けた。

「ちょ……………」

新羅さん良いんですか? こんなに…。」

「良いわよ良いわよ! 昨日の件で貴方達には色々迷惑かけたし、こんなんで許してもらえるなんて思っていないけど、少しでも罪滅ぼしになればと思って…。」

新羅は少し顔を俯かせながら言う。だがしばらくして顔をあげると今度は新八に向け頭を下げる。

「本っ当に申し訳ありません! 昨日は琲瑠裂の件のコトもありあの男だけじゃなく新八さんにまで手を出してしまって…。」

昨日の件… 確かに昨日は災難な目にあつた。新羅に気絶させられ、何より気絶させられる瞬間に「嫌いよ」などと言われたのだから。

「いっ…いえいえ！そんな頭下げないでくださいよ！ささっ！頭上げて下さい！」

言われるがまま、新羅は頭を上げる。

「確かに昨日は色々災難な日でしたが、僕もう気にしてませんから！対外の事は一、二日で忘れてしまいますし！」

ニカッ！と白く輝る

歯を見せ笑うと

新羅も少し微笑む。

「本当にすみません…。」

「神楽っ！貴方には身体に傷を負わしてしまった！最悪の場合血管に穴が空く可能性も確率的に低くはなかった！本当にごめんなさい！！」

テーブルスレスレまで額を近づけ頭を下げる。

「んーいいいよおー！べえつに気、にしてな、いからあー」

一方の神楽は、のんきに右手に巨大フランクフルト、左手にローストビーフを口に頬張り、その半分が何

言っているのかは聞きとれなかったがとにかく

神楽は昨日のこと

なあんも気にしていないようだ。

鶏も三歩歩けば忘れる…

とか言うが人間（夜兎）も

一日立てば忘れるものであるのだろうか…？

「で：でも神楽っ？貴方

お腹に私のヒール刺さった：」

「あれえだあったらみよう治ったアルよ！私」

夜兎族だから治癒力

ハンパあじゃないネっ！！！！」

フランクフルトを皿の上に不安定ながら置き、自分の腹を新羅に見せる…。

そこには、昨日のことが嘘だったかのように傷一つのないただの夜兎特色の透き通るような白い肌が見えた。「ちよっと神楽ちゃん！食事中に何してんの！レディーなんだしそれに他のお客さんにも見られ……………あれ？」

どうも珍しい。

いつもなら、子供連れの

親子やら、JKやらギャルやらメンズやら

少なくとも5席ほど埋まってるはずのてにゝずが妙な事に今日は銀時達だけの話し声しか聞こえないのだ。まるで貸し切り状態。

「いや貸し切ってたんだけど？」

「はっ？」

突然新羅が口挟む。

それに「はっ？」と言葉をこぼす。

「いやだから貸し切り状態じゃなくて貸し切ってたの！今日は！！！」

「金よ…」という二文字の言葉が銀時達の頭を木霊するかのよう過ぎる。

「「金あげるから此処貸し切りさせて」ってこの店の主人に頼んだらあっさり承諾してくれたのよ○○／いやぁ金の勢力って凄いわよね!! まるで人間が駒のように動くんだもの…。」

(何さりげにやべえ事言ってるのこいつ!! てかこの状況で顔文字使う意味あるのか?)

銀時の心の叫びはさておき新八はコホンっ! とわざと咳ばらいする。

「ええつと…まっ…まあ
とにかく新羅さんには億万長者って事ですかね…?
あははあ…。」

「億万長者なんて勿体ないお言葉。貸し切りに出した金は全て局長の銀行に入ってたお金を盗んできたものよー(笑笑) 手帳を鞆から取って口座番号適当に押して後は金を降ろすだけ…。ねっ!…簡単でしょう?」

「いや簡単でしょ!
って アンタ何やってんですか!! アンタそれもモノホンの詐欺でしょーがあああ!!」

新八の声は店内全域に響くだが周りからは冷たい視線を感じない。
そう今此処は貸し切りしてて人がいないからだ。

「詐欺なんてとんでもないとんでもない! 勿論局長に承諾得たわよ!

「お妙さんの働いてるキャバ嬢が今破綻の危機に陥ってるらしいですよ。キャバ嬢：いやお妙さんの為にも局長の口座に入ってるお金お妙さんに費やしてあげたらどうですか？」って言ったら、「お妙さんが居るからこそ我が命は今こうしてこの街に存在している」なんて言ったから
「じゃあ私がお妙さんに渡してくるから、手帳私に預けてくれませんか？」

はい成立！！！

そこからは貴方達のご想像にお任せしまあす！！」
ズズっーとホットコーヒーを啜ると、ハアっ！と一息つく。

「雑だけど大方こんなもんよ！理解出来たかしら？」

「理解ってもんじゃねえだろうがああ！！」

まあ近藤さんのことだから騙されるのは丸見えだけど、アンタただ金だまくらかして金巻き上げてるだけじゃねえかああ！！それが警察のすることですか！それで警察ですかっ！」

「警察だって生きるに故はこういう事も大切なのよ！人を騙して騙して生きる！それが人間ってもんじゃない？」

「全ての人間がそんな汚い人生歩むと思うなよ！！！！！！」

「まあまあ：局長には言わないでね！あの人今必死こいてお妙さんの為に金費やしている最中だからそのうちまた大金が手に入る日もそう遠くはないからねえ…」
目を輝かせながら窓の外の景色を伺う。

（駄目だ…この人と話してると自分の頭まで狂いそう…。）

新八一敗北を氣した。自分の頭を狂わせないために

「ていうか、新羅さん。

今日翠羽さん来るんじゃないかなかったですか？それとその友達みたいなー？」

「友達じゃなくて

翠羽の妹さん！そろそろ来ると思うわよ！

んまあ…あの娘達の事だから入り口から入って来るとは思わないけど…」

ボソツと独り言を言う。

だが新八等の耳に

はつきり聞こえた。

「おい…こういう事だ。入り口から入って来るとは思わないって…。」

銀時は食べるのをやめ、新羅の顔を見る。

新羅は苦笑いをし

「いや…だからそのまんまの意……」

「遅くなったですうー。

はいこれお土…産…」

「……だから嫌だって言ったんだよ翠羽…。もう皆集まってると思うからって……。」

パチっ―目が合う。

パチっ―顔を斜め？の

二重ガラス窓の方に。

パチっ―あれ？おかしいな…。なんで…人間がガラス窓から…？あれ上から吊されている…？いやワイヤーなんて見当たらないし、第一風吹いてるのに身体揺れてないし…？

まっ…まさか…！！

「いっ…いやあのね！先に言おうとは思ってたんだけど…言うタイミングが無くて…：…：ね。」

焦る新羅。

ドン引き顔の万事屋一家―

そして

「この娘達、1？くらいの鏡からなら何処からでも出入り出来るの…よ！」

翠羽ともう一人の女性、蒼琉が鏡の中から上半身だけがひょこつと出ていた。

「ぎゃああああああ…！！！！」

時計の針は午後3時
を回る。

楽しい楽しいおやつタイムは

絶叫の日和となった――。

女の涙に男は弱い

Part 1 (後書き)

銀) なあなあおい…

神) 何アルか…?

銀) 今回なんで主人公ほっぽいて眼鏡と連沢の会話が長いわけ? くらあー?

神) 確かにそうアル! なんで私あんな食い意地張らなきゃならないネ! もっと謎ディみたいなお嬢様風に食わせてもいいじゃないアルか!!

銀) いやお前は謎ディには向いてない。どうせならマツコ系でタラバガニを殻丸ごと食って後から口の中血の味になりーの蟹本店にクレームを言う方がお似合いだ!

神) てんめえ!!! 私を
一体なんだと思ってるアルかああああ!!!!!!

銀・亜麻音)

食べて寝て食べて寝て

う○こしてまた食べて寝る暇人女。

神) それはてめえらだろおがああああ!!

銀・亜麻音) ぎゅあああああああ……!!!!!!

※良い子はバランスの取れた生活をしよ……………ね…

―チーン…

新）あのお…僕は…？

女の涙に男は弱い P a r t 2

神楽 呆然…。

新八 啞然…。

銀時 失神…。

「ちよっ…銀時！大丈夫？口から泡吹いてる……てか魂半分出てる！…！」

新羅は開いた口から半分出ている魂を拳を魂に向けて無理矢理口の中に押し込む。

「ウップ！」

なんとか一命を取り留めた。白目から死んだ魚のような目に戻り、一応一安心？

「てか、翠羽達もいつまで鏡ん中から様子伺ってんのよ！さっさと降りてきなさい！」

「こっちへ来い」と手招きをする。

その様子を鏡の中から

伺ってた翠羽と蒼琉はこくりと頷くと、天使が舞い降りるかのよう
に鏡の中からスルツと出て 隣のテーブルに着地する

「ふうー間に合ったですう！あっこれお土産っ！適当に食べて！」

「それはさっき聞いたっ！てかちよつと待てええええ…！ごまかそうだったってそうはいかんぞ…！…！…！どういことですか！人間が窓から出て来るって！」

新八の鋭い言葉に翠羽と蒼琉は冷汗をかき、焦りながら

「い…いやいや何の事かなー？その窓開いてたじゃん？気付かなかったあ？私達あっちの方から大砲に

吹っ飛ばされて此処まで来たんです！ね…ねっ蒼琉！」

「そ…うそう！今歌舞伎町で主催している「大砲で何処まで飛べるか大会」やっているからねえ！僕達も一応参加してこうやってきたんだよー？」

「何処がああ！おもくそ窓のなかから上半身出てたでしょーがああ！！」

「い…いや？だからそれは…」

「翠羽！蒼琉！」

もう良いわよ……

…全て…この人達に話すつもりだったから……。」

ガムシロップの蓋を器用にかけてホットコーヒーの中に入れるところーっと吸い込まれるようにコーヒーの中に入る。

「ちよっ！新羅！全て話すって何を……」

「おい…窓から出入り出来る事とその薔薇乙女とかいう奴と何か関係あるのか…？」

「……………えっ？」

キョトンとした開いた口が塞がらない翠羽。

「今……ローゼ……ンメイデン……って……」

「察しが良いじゃないの？そうよ……この娘達はローゼ……」

バツー！

「ちょっと！新羅！

ミーディアムでも何でも無い奴に何教えてるですか！！このぼんくら共ただのド素人ですよ！ド・素・人！！」

胸倉を掴み、前後に激しく振る！！それでも新羅は顔色一つ変えずに「ミーディアムになった人も全員素人でしょ？」

「だからって……」

「ちょっと待って下さい！！何なんですか！さっきからローゼンメイデンとかミーディアムとか意味わからない発言ばかりして！！」

新八の言う通り、この小説を見ていただいてる方々も

「はっ？何ローゼンメイデンって？ミーディアムって何？ミュージアムの間違いじゃなくて？」

みたいな

疑問を抱いてる方々も多々おられることでしょう。ナイスだよ！！眼鏡っ？！

「そこ新八で良くないっ！！！！っーか眼鏡の後に？つけるのやめてっ！！！！腹立つから！！！！」

ボソッ……

新八のツツコミなんて読者は興味ないんだよ。

さて次へGO↓

「あっ！そっか！

てか昨日あったことから話した方が話の辻合が繋がるかもね…。
あなたたち昨日は気絶してたから話の読みがわからないのも無理もないし…。」

「昨日…？」 「お教えしましょう…。昨日あったことを…全部。」

「そして…翠羽…。早くこの手を離しなさい…。」

新羅は昨日あったことを新八等が気絶した後にあった出来事を語り始めた。

琲瑠袈の存在―

高梨の本性・そして

本来の目的の事も…

「大体御理解頂けた…？結構解りやすく教えたと思うんだけど…」
さすがに刺激は強すぎたか…？テロ活動をしている奴がまたも仲間の
仇討ちの為ごときに自分等の命を利用したのだから…
…と…そう思われたが

「じゃっ…じゃあ新羅さんは人殺しとかそんなんじゃなくそのテロ
活動している琲瑠袈って組織の人間を潰そうとしましたが、琲瑠袈
は表舞台には名が出ておらずさらには庶民という設定で表で生き
てきたから

「連続庶民殺人事件」なんて変な事件で呼び名されてしまい挙げ句
新羅さんがまるで犯人扱いになってしまったと…そういうことです
か？」

「えっ…ええまあ…。」

「良かったあー。新羅さんが本当に人殺しじゃなくて…!!」 自分
の胸に手を当てると、ふうーと息をつく。

「そうアル!! 新羅は罪のない人間を斬るような馬鹿な女じゃない
ネ!!!!」

新羅の顔を見ると華のある笑顔を新羅に向けた。

新羅は啞然とした顔で三人の顔を見る。

(なんで……？普通こんなこと言われたら誰だって…)

「誰だって落ち込むはず…！なんて思うんじゃないよ…。」

「……！」

「こいつらはそんなもんで心曲げたり落ち込む程大層な奴らじゃねえ……。」

新羅の思いを悟るように先に銀時はパフエに夢中になりながらも言う。

「そう……。確かに…。」

「そう言われてみればそうかもしれない……。」「何やらがみがみがみと小さい子供のように言い争う二人を見て、微笑んでいると、銀時は何かを思い出したらしく新羅の顔を直視する。

「連沢！だったら

なんでてめえは組織内部の人間だけじゃなく表舞台で瑋瑠袈に依頼した人間まで手に掛けている！」

「……！」争い事をやめ、新羅に顔を向ける神楽と新八。

「ピンポン！」

実はそこが今回重要な役割を持つローゼンメイデンが出てくるんよ

「！」

ピースを作り、ウイंकをバチツ☆と決めるとピースを作った右手でフォークを持ち皿の上に盛ってあるスパゲティをフォークに360巻き回しそれを口にパクツと入れる。

「……まず手始めにローゼンメイデンとは何か…？」

まあ

ローゼンメイデンってのは要するに

人間じゃない…。」

「……」

人間じゃない…？

………！

えっ…待っままま……ちよっ！」

「簡潔に言えば

ローゼンメイデンってのは実は

・

人形なのよ…」

「はいっ？」

「まあさつき翠羽に邪魔されたから言うタイミング削がれたけど私の後ろにいる

翠羽と蒼琉 ……

ローゼンメイデン
なものなんで……

正確に言えば
ローゼンメイデン
第3ドール 翠星石
と

ローゼンメイデン
第4ドール 蒼星石

これがこの娘達の
本当の名…！

二人ともこの場で自己紹介を…」

「…私が真選組四番隊副隊長

奥平 翠羽

んで

ローゼンメイデン

第3ドールの 翠星石 ですう…」

「そして僕が翠羽の妹

奥平 蒼琉 また

ローゼンメイデン

第4ドール 蒼星石

よろしく…」

「自己紹介は自己紹介だけど…」

さすがに…

テーブルの上での自己紹介は無いでしょ…」

女の涙に男は弱い P a r t 2（後書き）

早めじゃないけど、自分では早めに更新した感じがする W W

そういえばいつのまにお気に入り登録が増えてた！

どうもありがとうございます∩・ω・∩）

お気に入り登録や感想等お待ちしております W W

人形には感情ってもんがある！？じゃあ髪が伸びる人形って…

「にっ にに！……………に

人形！！！！………」

三人は目を丸くする。

「ええ………正真正銘

人形よ…

でもこんなことで驚いていたんじゃ話進まないから質問は後で受け付けるわ…

さっきの続…」

「おいおい…ちょっと待てよ…人形なんて言っただけ脅してるつもりなのか知らねえが…そいつらが人形だって証明出来ることあんのか…？」

「本拠ならあるけど…

翠羽・蒼琉腕を……。…」

何を言い出すかと思えば、腕などとはざきだす新羅の顔を嘲笑うかのように見下す銀時。

翠羽は制服の袖を

蒼琉は着物の袖を

「あまり見せたくはなかったですけど…」
嫌々ながら捲る。

「よく目を擦って見てみなさいよ。この娘達が人形だって証拠をね……」

「!!!!!!」

「これ……………!!」

わざわざ目を擦らんでも一目見ればわかる。

翠羽と蒼琉の肱は普通の人間とは異なる肱をしていた。人間の肱は関節というものがありそれがあるからこそ自由に腕を動かすことが出来る。だが翠羽達の腕は球体関節。普通の人間では有り得ない。

「見ての通り。私達人間とは違う腕をしてるでしょ？他にもこの娘達の膝とかも人間とは違う形をしている……」

「ごめんなさいね二人とも……。わざわざ。」

「大丈夫です……。」翠羽は一言申し……

蒼琉は無言のまま縁を戻す。

「脅してるつもりなんてサラサラないわよ……ただ私は本当の事を話しただけ……本拠まで根拠だってあるのだから信じてくれるわよね？」

「……。」

無論返す言葉がない。

「それじゃあ……さっきの続きといきましょうか……」

ローゼンメイデンってのはさっきも言ったとおり人形……

だけどこの娘達が今

こうやって生きていけるのは 人間がこの娘達の首の裏にある鍵

穴にローゼンメイデンを目覚めさせる専用の鍵を入れ卷いたから。

それは

のちの“契約”に繋がる」

」

「契約――？」

「そう：契約とはローゼンメイデンとその人間がローゼンメイデンが嵌めている薔薇の指輪に

キスをすることで契約は成立する。契約をした者をローゼンメイデ

ンの中では

ミーディアム
契約者

と呼ぶ。

契約をすればその人間とローゼンメイデンは薔薇の契約を結ぶこととなる：だけど結べばそれ以上に代償というものも持つこととなる。ローゼンメイデンは契約をすればより強力な力を得る。その得る力の原力は元は契約を結んだ人間の力。ローゼンメイデンが力を使えば契約した人間の力は消耗する。より強い力を使えばその人間は：死へのカウントダウンが始まる。」

「力を使うったって：普段こいつらそんな戦争みてえなことするにとでもあんのか？」「そう……言い忘れてたわ。

これは：ローゼンメイデンにとって一番大事なこと……」

「大事……？」「ええ：ローゼンメイデンにはね：使命があるの。その使命って言うのは

アリスを目指すこと」

「アリス…？んだそれ…？」

「アリス…どんな人形の中でも気高くてどんな人形よりも美しくて一点の汚れがない。そのアリスは必ずしも人形の中では有り得る存在…：…だけどそのアリスになれなかった人形

それがローゼンメイデン」

「！…！！！」

「ローゼンメイデンは

第一ドールから第七ドールまでいて皆それは姉妹。皆それぞれ仲の良い姉妹…。

だけどローゼンメイデンに与えられた使命…それは…

姉妹同士で戦い

一人生き残った人形がアリスとなること…

それが“アリスゲーム”」

「！…：…アリスゲーム！？」

「アリスゲームの勝者こそが本当のアリスになれる」

「だが…：…何の為に…！！」

アリスになる…！！アリスになって何になるんだ！」

「それは……」

「お父様に会うことです…」

「翠羽！」

新羅が言いかけた時に翠羽は自ら口を開く。

「私達を造った人の顔は

姉妹全員誰も覚えてないです…。ただわかるのは

“お父様”という名前だけ。アリスになれば…お父様に会えるです。

だけど…確かに…!!

お父様に会いたいですけど！そんなのはおかしいです！仲の良い姉妹で戦うなんて…ましてや蒼星…蒼琉と戦うなんて絶対できないです！！だから…私達はアリスゲームをしないで…お父様に会う方法を考えてるです！

でも…私達以外のドールは目覚めてるのか…誰と契約をしているのか！ 他のドール達が私達の

知らない場所でアリスゲームを始めているかもしれない……

それもわからない…

もう私は……嫌なんです！！姉妹が…戦う姿を見るのは！

「お前等…姉妹で戦ったことあるのか…？」

「……一度だけ…ですう。七体全員で…

でも結果…決着は尽かず、私達はある馬鹿ウサギにより…そこで深い眠りに
つきました…。

気付いた時にはもう40年の時が過ぎていたです。

姉妹同士が会うなんて滅多にないこと…

私と蒼琉が今こうして会えたのは、本当に偶然に過ぎないですう…。

ですが…偶然にも

この街でもう一人のローゼンメイデン…私達の姉妹に会いました。

第六ドール雛苺ひないちいに出会いました。

腕はもぎ取られ

顔半分 輝が入ってて

片方の脚が無…い状態で

惨い様で

この歌舞伎町の

ゴミ捨て場で

40年ぶりの再会を果たしました…」

人形には感情ってもんがある！？じゃあ髪が伸びる人形って…（後書き）

ローゼンメイデンファンの皆さん！深くお詫び申し上げます！

私自身の勝手な想像を広げた挙げ句、雛苺を…あんな惨い姿で出番に出してしまいました。

前々からローゼンメイデンキャラ崩壊していますが　そういうところは

スルーでよろしく願います！！

＊感想・お気に入り登録よろしく願いますww

クラスのムードメーカーの長所は笑顔

「!その…

第六ドール…って言う

人形はなんで…

この街の歌舞伎町に捨てられてたんですか…!?!? まさかそのミー
ディアムって言う人に…!?!?

「違います…。

こっからは…新羅に話を進めてもらおうと良いです…。翠羽は
…もう…」

俯いた顔を上げることなく新羅にバトルタッチをする。

「やっぱ…同じローゼンメイデン…いや姉妹が一人居なくなっただもの…。無理もないわ…。」

新羅も翠羽に顔を向けたがすぐに前に身体を向け、話を進める。

「ローゼンメイデンってのはね…自分の力だけではアリスゲーム…他のドール達に勝つことは出来ないの。もしそのドールがより強い人間と契約交わしたのならば尚更勝ち目はない。だからローゼンメイデンは数々の人間と契約を交わしては…切りまた新たな人間と契約しては切つての繰り返しをし、より強いミーディアムを探し回った。そのせいか…一時期

江戸ではローゼンメイデンの噂が流れ始めた。さすがにローゼンメ

イデンと

言えど、「動く人形」人形
なのに食べ物を食べる。寝る…笑う。ほとんど人間と何の変わらない。
い。

だけど、

ある人間はこう考えた。

ローゼンメイデン

「動く人形を売れば、

大金が手に入る。

持ってすれば俺達は

億万長者」だと。……」

情報が回ってきたのはその一週間後……。私達は急いで全ての
ローゼンメイデンを探しだし話した。

「このままじゃローゼンメイデンは人間達に売買される」
って…。

だけどある人形だけが…

一体の人形だけが…

その場にいなかった。」

「それが第六ドールってやつか？」

「ええ…」

新羅は小さく頷く。

「まさか……………って

最悪な事まで想定して私達は探した…。ちょうどその時、私達はこの街に来たばかりで真選組入って早々だったから、あまりこの街のルートが知らなくてね…。

この街にまさか居ないだろうって思いながらもまるで迷路のような街をさ迷って探してた。でもあるゴミ捨て場に差し掛かった時

ある服が目についた。ピンクのフリフリドレス。あの娘はフリフリが大好きだったし……………話によれば
ピンクが姉妹一大好きだったらしいから。

私もあまり雛苺をよく知らないけど……………
頭に顔よりはるかに

デカイリボン付けて
いつも笑ってたんだとよ…。

でも……………私達が会った雛苺はもう雛苺じゃなかった。

原形が留まっていなかった 惨たらしい様…。

アリスゲームをやったからこんな事になったのか……………って私は思ったから

ローゼンメイデンに
聞いた。だけど

聞いた話では、最初

ローゼンメイデンを買収

する噂が私達の耳に届いていた時に私達が行動した時にはもう既に遅し、ターゲットは

第六ドール雛苺に絞られていた……。

あのまだ幼くて鈍い

馬鹿人形だから

まんまとそいつらに捕まっちゃったらしい。

雛苺はその時でさえ、

自分にフラグが立っていた事に気付いてなかっただろうしね…。

そこで売買するもの達が集まったらしいんだけど どうも買収する連中が、雛苺を巡って揉めたらしくそのうちどっかの餓鬼みたい雛苺の片方の腕を掴んで引っ張り合いっこしてたんだって…。人形だからって

痛みを感じない訳じゃないし尋常じゃない痛みが身体中に走っただろうけど…。 ついには

片方の腕

片方の脚

とれちゃったんだって…

自分の姿を見て、痛みよりも先に
ショックを受けた雛苺はそのまま気絶…。

でもその売買側の人間達は

「死んじやった」

とでも

思っちゃったんじゃない？

いらなくなった道具は
捨てるのが一般的。

そのまま

この街 のゴミ捨て場に

普通に

捨てた。

雛苺が目覚めた時

自分の醜い姿を見て言葉を失ったでしょう…。

お父様からもらった

ボディーが見るも無残なガラクタ（ゴミ）となって…。

そして…腕と脚がとれた痛み……。悲しみ…。

その痛みと

絶望…

哀愁に満ちた情を感じながら

雛苺は ……。

その直後よ…

私達が雛苺を見つけたのは、

雛苺からは

ローザミステイカが

身体から出てきていた
だから

この娘は
一生目覚める事はない。

アリスゲームにはもう
…。

参加しなくて良いのだって…

「ローザ……？」

「ローザミステイカ：
人間でいう“心臓”

ローゼンメイデンは

ローザミステイカという

光輪を伴った結晶があるから生きていられる。言い忘れてたけど、ローゼンメイデンがアリスゲームに勝利するためには、七体の身体の中にあるローザミステイカを全て集めれば、その人形こそがアリスになれる。グロい言い方だと姉妹同士が七個の心臓を奪う合うゲームってこと！」

「そんなっ…。姉妹同士で戦うなんて……

それに雛苺Sっていう

お人形…。

苦しみながら死んでしまうなんて…」

「人形に死…はないです…

ローザミステイカを奪われれば確かに私達は
ただのガラクタに過ぎなくなるです…

でもガラクタになったとしてもアリスゲームが終わるのなら……私
は……」

翠羽の言葉に言葉を失う万事屋一同。

「……………私達は

その売買人が誰なのか。

その組織は一体何処の組の連中なのか……………

知るのにそう

時間は掛からなかった。

その組織ってのが

雛苺を手に掛けた連中ってのが

琲瑠袈だったから。」

クラスのムードメーカーの長所は笑顔（後書き）

（銀）更新遅つせえよ！！！！！！

亜麻音）まじですみませんでしたああああ……！！！！
（土下座 ああああ！）

どんな天才でも人の考えることまではわからない

「だから…ミーディアム

以外私達を知る人間は

殺らなければならなかったです…もう…人間共の手で姉妹が消えてく姿なんて見たくもないですから…。

あの高梨っていう男もローゼンメイデンを知る奴です…あの時、殺しておけば……。

琲瑠袈は

テロ活動もしている連中

ですから、私達が

ローゼンメイデンを知る

琲瑠袈を

消したとしても、

他人から見れば、

テロ活動を行う組織を潰した…。私達は善意と見做されるだけ…。

どちらにせよ一石二鳥です…。幕府にとっても私達からにとっても邪魔な組織が消えたんですから…。」

「だが…なんでそこに連沢が関係している？そいつはローゼンメイデンじゃないんだろ…？こいつは

琲瑠袈に関係していない

女まで手をかけた。」

「私は確かにローゼンメイデンじゃないわよ。

だけど、

もし翠羽達が

下手に琲瑠袈に近付いて

連中を潰そうとしたら逆に奴らにローゼンメイデンだって顔が割れちゃうじゃない。そうしたら多分翠羽達は雛苺と同じ道を辿る事になっていたでしょう。

だから代わりに私がいづらに近付いて潰そうとした。だけど変な事件の犯人に仕立て上げられたりで…。

だけど、噂は琲瑠袈だけ

じゃなく本当極僅かな善良な市民にまで流れ込んでいた。悪いと思っただけ。

けど…ミーディアム以外知られてはいけない…。

そして昨日の女はただの

市民だったけど

ローゼンメイデンを

知っていた。

だから

……消した」

「それは…つまり…。」

「私達が濡れ衣を着させてしまった……。。」

簡単に言えばそういうことになる。無罪を着させてしまった…ローゼンメイデン（私達）のせいだ。

「そんな…私は当然のことはただけよ！だって私…翠羽のミードイアムじゃない♪」

「……………へっ？」

あどけない顔の三人。

頭にクエスチョンマークを浮かばせて「ん？」と可愛く首を傾げる新羅。

「あれ？教えてなかった？私翠羽の（ミードイアム）契約者だけど
！！」

「……………ええええええ！！！！！！」

「ほらこれが契約の証♪」

右手の甲を見せると、そこには薔薇の指輪を親指に嵌めていた。

「契約すれば契約した人間も同じ指輪を嵌めることになるのがルール。翠羽にも同じ薔薇の指輪が嵌まっているわよ♪」

「まっ…真面ですか…！新羅さんが契約者だったなんて…。」

「えっ…何？もしかして嫉妬？

新八さん…私と契約したかったーとか？」

おちよくって言う新羅に、顔が梅干しみたいに赤くなり

「ちっ違います！ただ僕は…」

「童貞気持ち悪いアル…。しばらく私に話し掛けないでくれるアルか…。」

「そこマジ退くのやめてえええ…！！」ピロロロロロ―

一つの着信音になる―。

「私のだ…」

新羅は真選組制服のポケットから携帯を取り出す。携帯は綺麗にデコレーションされており、大量のキーホルダー等がジャラジャラついていた。

名前表示を見ると、

「ドスコノヤロオ」

「……………」

どう考えても

ドSと居りやあ

あいつしかいない。

「はあい…もしもーし？」

「あっ…新羅か…いきなりで悪いがちよいと質問があるんだが今大丈夫ですかイ…？」

どうやら質問があるらしく電話寄越したらしい。

「うん！何ー？」

仕事の件だろう…。
と皆思った。

新羅以外は……。

「俺と土方さんどっちが

副長に相応しいか決闘すんでさあ…新羅はどっちが勝つと思いやすか…？」

「総悟！！！！俺がいつてめえと決闘するなんて言った！」

「早く決めてくたせえ…」

野良犬がマヨネーズ食いたってほざきだしたでさあ…」

「んだと鬼畜系が！！！おい連沢！ふざけた返答すんじゃないか？」

「やっぱ相応しいのは総悟じゃないかしら♪」

「……………」

（ふっふざけた返答したああああああ！！！！）

「つ…連沢 ああああ！！てめえ後でどうなっかわか…」
ピッー

土方の話などまんじりとも聞く耳持たず携帯をきる。今ので土方の機嫌は更に 上へと上昇！火山噴火するくらいに！だが

新羅はもしかしたら

土方の機嫌を更に損ねる為にわざとこんな行動をとったのかは知らないが…。

「時刻は4…25…か。かなり時間潰しちゃったわね…。」

「あーそうですね…もう空が紅いや…！僕達もそろそろ帰りましようか？」

「えー！嫌アル！もっと新羅と話してたいアル！！」

「また今度ね！」

駄々こねる神楽に笑顔を振り撒く。

「私レジ行ってくるから、貴方達は先に外出てて！」

「了解しました！」

新羅以外はてにけずを後にした……だが銀時はちらっと新羅を見ると神楽達に手を引かれてにけずを後にする。

しばらくすると

てにけずから新羅が出てくる。

「すみませんわざわざ……

いくらでした……？」

「フフっ……内緒よ内緒！」

だがあの皿の量。値段に

訪わず数々の物を頼んだ訳だから軽く三万はいつてることは間違いないであろう。

でもそのお金は近藤さんからだまくらかして奪ったお金だから新羅は嫌な顔一つしていない。桜が満開したような満面な微笑み。

「今日話したこと言った事誰にも言わないでね……」

それとこの娘達の本当の名……翠石星、蒼石星……ってことも……。今までどおり翠羽と蒼琉で……！」「分かりました……！！」

「なあ……連沢……。てめえ………」

死んでるのか…？」

「…はい？」

気が狂ったのかわからないが銀時は訳のわからないことを話し出す。

「お前、あのコンビニ事件の時、てめえと俺は手を交じらわせた。だがてめえは何か察知したみたいに手を振り払った。その後神楽やぱっつあんがきた時、ぱっつあんが手を指し伸ばしても手を交じらわせず神楽の時と同じ。

そしててめえと

手を取り合った時にてめえからは

温かみを感じなかった。人の体温はそうそう普通どんなに真冬の日でも少しは温かみを感じるはずだが、あの日はそこまで寒くはなかった。ただ…てめえの手はまるで死人のように冷たかった。」

「……かなの」

?

「アンタツ馬鹿なのですかあああああ……！！！！！！！！！！」

翠羽は、

銀時の股間におもいつきスピードのある蹴りを食らわす。股間を抑えながら地面にうづくまる。

「アンタ最っ低!!!!!! 人! 死人呼ばわりするなんてマヨネーズ鼻にぶち込んで即死させてあげたるかこらああ!!!!」

口調!!! 口調!!!

なんかキヤラ違くない!!!!!!

「んなこと言ってる場合じゃないです!!!! 良いですか!!!!」
耳闊歩時って聞くです!!!! 新羅はね! 人一倍の冷え症なんです!
!!!!!! だから貧血なんてしょっちゅうのこと!!!!!! かわいそうと
思わないですかああ!!!!!!」

「そ…そういうことなの…ごめんなさい変な誤解招いちゃって？私ホント

酷い冷え症だからよく

「大丈夫？」とかそういう

声かけられるんだけど
なるべく

手は交わさないことにしてるの…。

手を交わせば「大丈夫？」

とか聞かれるし、なんか心配してくれるのは良いんだけど余計傷付くって言うの？だから絶対交わさないと思っていたら

ノリで交わしちゃって

途中交わしたことに

傷付いてあんな酷い振り方しちゃったってこと。ごめんなさい…」

「あっ…ああ…こっちこそ…な…」股間が上にあがりなかなか下に降りて来ないため痛みが尋常じゃないほど下半身を痛めつける。

「…………。翠羽も謝りなさい。銀時将来子供作れなくなったらどうすんのよ…。」

「知らないですう…！死人呼ばわりしたそっちが悪いんですから！」

そっぽを向いたまま顔を合わせようとしなない。

「…………」

意地だけは張る女なんだから……」

―約四分たったころ

銀時の股間の痛みも引きすっかり直立―まではいかないが立てるぐらいに回復した。

「んじゃ私達はこれで…

あなたたちも帰り気をつけてね。」

「はいっ！ではさよならー！！！！」

背を向け歩きだす。

だが　そこで両者側の空気が変わる。

両者―考える事は違う。（たがう）

良い人ほど腹の中は真っ黒黒すけ

「新羅さん達の話なんか凄くビックリする話もあったけど……
ローゼンメイデン……
生きた人形……か」

「かわいそうアル……！姉妹同士で戦うなんて……」

あっ……そういえば……

銀ちゃんはなんであんな事聞いたアルか……？死人なんて……」

「……どうも臭えーんだ……

あいつら……。」

「？」

「あいつら……まだ俺達に何か隠してやがる……。」

「銀ちゃん（さん）？」

「たくっ…なんでミーダイヤモンドでもないやつにローゼンメイデン教えなくちゃいけないですか…！」

「そうだよ！新羅…新羅が翠羽のミーダイヤモンドって名乗るなんて思わなかったよ。」「そういえば蒼星石は誰と契約したですか？」

「それは言えないよ…
翠星石」

「なんですか！姉に言えないなんて…！！
けちん坊蒼星石…！！」

「あっ…私途中でお団子買ってくるから貴方達は先に屯所に帰って…！！」

「えー翠羽も行くです…！！」

「多分副長争いがどうのこうので土方と沖田のことだから屯所とかめちやくちゃにしているとと思うんだよね！先に帰って二人を止めてくれない？崎とか絶対瀕死状態だと思うし他の隊士達も……」

大体予想はつく。近藤とかもうフルチンで魂抜けていそうだし。

「じゃあ僕は帰るよ！君達みたいに僕は街護る為に警察になろうだなんて思ったことないし。それに僕にはマスターがいるから……」

蒼琉にもミーディウムがいる！。翠羽には翠羽のミーディウム。それぞれの志は違う。ましてや

蒼琉は真選組とは全くの無関係。一緒に住むのは不可能なこと。

「そう…会える日は少ないからね……。今日会えて嬉しかったわ…。また会える日を……」

「バイバイです蒼星石！」

蒼琉はそのまま夕暮れの道を一人歩いていき姿が見えなくなると

「じゃあ私ももう屯所に帰るです！新羅も早く帰ってきてくださいね……」

「ええ…また…」

翠羽は走って蒼琉とは逆の道を走っていった。

「あの娘達も馬鹿ね…」

ローゼンメイデンなんだから窓に入って帰っていけば良いものを…

…」

一人佇む道でクスツと笑う。

「死人……だつてさ…」

とうとう言われちゃったね。」

独り言をぼつりと言うと、
前に歩きだそうと一歩踏み出す。

…が

何かに察知したらしく

後方に身体を素早く向ける

―誰もいない…

夕日の色に輝く道が後ろに永遠と続き 電柱がところどころ立っ
ていて

改めて見ると
気味が悪い―。

「私を就けにきたか…。」 一言言うつと、

強い風が新羅に目掛けて吹く。

そんなことお構いなく

また前を向き

そのまま

オレンジに照る公道を歩く。

浮かび上がる黒く長い陰―。

陰が映し出した

のは

光（希望）？
陰（絶望）？

良い人ほど腹の中は真っ黒黒すけ（後書き）

次は万事屋銀ちゃん宅に帰ってきた三人の会話です↓

騙された後の後悔は重い P a r t 1 (前書き)

今回はちょっとした番外編的なものです！

騙された後の後悔は重い Part 1

現在…5時半を過ぎた頃

万事屋一家は

我が家「万事屋銀ちゃん」宅に帰宅していた。

その中での会話である。

「いやあ今日は

食った食った！明日の朝飯食べなくていいんじゃないかねえか？もう…。」

自分の腹をパンパンと叩き腹一杯だというサインを送る。

「駄目アル！！私明日の朝方3時になったら腹の虫がピギヤーピギヤー喚くアル！朝飯抜きなんてジョーカーの入っていない婆抜きと同じネ！！！」

餌皿からはみ出る程の大量のドッグフードを盛りながら銀時に言う。
その間定春は目が輝いており舌を出したり退いたりしている。

「何がピギヤーピギヤーだまるで雨の道の中車で轢かれた瞬間声を上げる蛙みたいじゃねえか！」

ピギャーを轢かれた蛙の声と例える銀時。

「銀ちゃん…蛙轢いた事あるアルか？」

……………。

「俺はそんなグロテスクな事はしねえぜ…。

道端に蛙がいたとしたら

ちやあんと避けるしな～！

どっかの作者と違ってな～！」

にんまりと黒い笑みをこちら（作者）に向けた。てか私に向けた…
…！。

あはは～何の事…かなあ…。

そんな事より

次進め…。

「皆さん聞いてくださあい！この人ー今年の夏に部活帰り友達と帰
ってたらしいんですけど」

ちよつと待っ……………！

「途中友達と道分かれる時にバイバイって言いかけた瞬間「ピギャ
ーグチョッ！！」ってなったらしいですよー♪その瞬間

「…蛙…轢いた…」って

銀時は口を尖らせ

「えー嫌だしい♪俺この頃あーだこーだでストレスたんまりなんだよ！」

「何ストレスって…」

「そんな時やっぱ人虐めて痛め付け暴虐まではいかねえが弱りきった所で釘を刺す！Sって最高だよなあ！

あの作者の顔絶望に

満ちたあの顔！FU〜♪」

わざとらしいあの顔…。

諸行無常で天罰を出食らわしてやろう

私はとうとう堪忍袋の尾が切れた！わたし作者の

顔の前に一本の紐が垂れ下がる。

それをおもいっきし引っ張る。

「何何〜亜麻音ちゃーん♪それ何のひ…グベアッ！…！！！」

天井一部が開くとそこから数個の盥がおちてくる。

その下敷きとなる銀時。

ゆっくり立ち上がる。

「…今度その話私の前でしたら……………」

目玉ほじくるぞっ♪」

殺気っ！！作者からの殺気はどす黒い黒を纏ったオーラが笑顔とは

裏腹に漂う。

「んじゃっ話進める為に私はそろそろ♪ばいばい♪」

新八と神楽には満面の微笑み。銀時には冷酷な目。冷たく感情の一つもないあの目は銀時だけでなく神楽と新八にも恐怖に怯えさせた。作者は盥が出てきた所へ登ると天井を閉め三次元へと帰っていった。

———二分後———

ようやくまともな話が始まりますねっ♪ではどうぞっ！

「ええっと…まあ話変わりますけど………」

銀さん…ほんとにあのままで良いんですか？」

「あっ？」

新八の質問に、適当な返事をする。

「今日の奢ってくれた分のお金の件ですよ！本文には軽く三万とか言ってましたがあれ絶対一桁じゃ済まない量でしたよ！いくら近藤さんからだまくらかした金だからって近藤さん困ってるはずですよ！」

「大丈夫だよ！あの女…
お妙さんこのキャバに費やせば？とか適当な事言って事は終えたんだろ？心配すんなよ！」

「私さっき新羅が手に握ってたレシートちらって見たアル。

30万越えだったアルよ…」

「……………」

「大丈夫大丈夫…」

「大丈夫じゃねえだろ！！！！！！何30万越えて！！てめえらど
んだけ高級品頼んでんだよ！！！！！！」 「私、そんな高級品頼んで
ないアル！軽くSランク和牛ステーキっての5回くらい頼んだだけ
アル！後は皆安物ネ！銀ちゃんもAランクの和牛ステーキ三回くら
いだったアル！」

「それじゃあ諸二桁行くわああああ！近藤さんマジでヤバイですつ
て…！キャバとかそんな関係なくっ！あっ！

そういえば
家には高梨さんからもらった1000万円あるじゃないですか！！
それちよつと分けてあげましょうよ！」

ポンッと右手の拳を左手に落とす。良い案を出したとばかりにジュ
ラルミンケースに小走りに向かう。

「はあー！！冗談じゅねえよ！！！！その金は俺達のもんだ！！！！あんなゴリラに渡したところでバナナ代にしか変わんねえよ！」

「あんな税金泥棒なんかに渡したらそれこそ血に泥を塗るようなものネ！」

真選組には渡さんとはかりに二人は淡々と暴発的な事を新八目掛けて吐く。

新八は「僕に言われても…」と呟く。

「でもそんな事言わずに、ほんの少しだけで……」

ジュラルミンケースを開けた瞬間、

新八は言葉を無くした。

「おーいどうした？新八君金の束見てあまりに衝撃走ったか？」

眉間にシワを寄せて肩眉がぴくぴく上下に唸る。

「あっ……あの銀さん…これ

金の束じゃなくて……

紙の束です……………」

「はい？」

騙された後の後悔は重い Part 1 (後書き)

何故私こと亜麻音が出てきたのか自分でもさっぱり。

小説内にかいてある蛙事件は

あれ……

事実です…。

「目玉ほじくるぞ☆」

とか書いてあるけど

逆に

私がほじくられそうですね。

銀さんや銀魂ファンの皆さんに（汗、

騙された後の後悔は重い Part 2

新八の冗談ぶりにやれやれと両手をヒラヒラさせる。

「紙の束？」

冗談きついで新八！

とうとう眼鏡の度合わなくなったんじゃないか？

眼鏡センター行ってきて

巨乳美人さんにでも

診察してもらいな 童貞！」

最後の言葉にグサツと刺さるがそんな事はおいという新八は急ぎ足で金の束：紙の束が入ったジュラルミンケースごと銀時の前まで持ってくる。

「良く見てみて下さい！！外側にあるのは一万円かと思えば玩具の一万円札！！そして中身はほらっ！

あーら不思議

真っ白けっけの紙の束！

状態ですよ！！！」ほんと……
あーら不思議状態っ！

新八の言ってることは冗談なんかではなく誠に事実であった。玩具の一万円札が四方八方に広がっており、一万円を一枚めくれば真っ白けっけのコピー用紙が一万円札の模りになっており「こんにちは」と顔を覗かせていた。

「銀さんっ僕達騙されたんですよ！！！！高梨さんに！！！！金で動かされたんです！それも偽物の！！！！」

「ハッハハハハハハ……」

じゃあ何

俺達嵌められたってか？

命金で買いやがってそれに乗せられた俺達は今この場で事実だった。これで俺達のご愁傷様って訳か……。

酔狂な話だねー

へへっあハハハハ……」

ガッシャアアアアン――

「冗談じゃねえぞおおお……!!」

ジュラルミンケースを壁に向かってスパークング!! 見事にケースは木っ端みじんに碎け堕ち、蝶が舞うように紙の束が美しく入れ雑じれ舞う。

「ざけんなぞらああああ

高ア梨イイイイイい……!!」

……

「何だね騒々しいね…」

煙草を加え天井を見上げるのは「スナック お登勢」の女主人 お登勢。

「ドウセマタ喧嘩デモシテ騒イデイルンデシヨ。関ワルダケ無駄デス！シカトシカト！」

片言口調の猫耳叔母さ「オネエサマ…」
おっ…お姉様ことキャサリン

「お登勢サマ…」 「ああ…頼むよ…。」

騙された後の後悔は重い P a r t 2 (後書き)

絡繰り家政婦ことたまは
お登勢に頼まれた通りに仕事を熟した。 (こなした)

2階へ上がり、銀時達を黙らせて来いと同時に

家賃収納してこいとー。

良く女達のコシヨコシヨ話を男が盗み聞きしてると「レディーの話に首突っ込み

サブタイ長っ!!

自分でも思った。

こんな長いサブタイ決めたけど小説本文とタイトルはあまり深い意味はない（笑）

良く女達のコシヨコシヨ話を男が盗み聞きしてると「レディーの話に首突っ込み

——屯所にて——

屯所に帰宅すると

予想通り土方と沖田の激しい攻防戦が繰り広げられそれを止めようにも止められなかった局長こと近藤勲はどんぴしゃフルティン姿で隊士達に看護されていた。翠羽が来援したため、事はそう長くは続かなかった。

えっ—？

どうやって

二人を止めたかって？

翠羽……………

キレると「鬼の副長」より倍怖いよ……………。

夕飯を食べ終えた女隊士
二人は自分の部屋へ戻り 隊服に着替えようとして
いた。

そう

今日は 新羅達の

———巡回日。

「新羅あー何度も言いますがなんであんな連中にローゼンメイデンの実情教えたですか？」

自分の髪を丁寧に解く翠羽。その問いに飽き飽きと

「…………仕方ないでしょ。あの時私口滑らしちゃったんだから言わざる終えないじゃない…。」

「でも…………新羅は私のミーディウムなら知っているはずですよ。伊達に噂が漏れればまたローゼンメイデンの中で犠牲者が出るんです！！だから私達はミーディウム以外私達を知る人間は排除してきました。それに新羅も賛…………。」

なのにお前は…………姉妹をまた消してくつもりですか…。」

「そんな事誰も言ってないじゃない…。私だって信用できないって思った人間ならまっ先に肉塊にしてるわよ……」

「信用……できない？ んじゃあ…」

「私は信じてる。」

あの三人は…万事屋さんは
…絶対…

約束は破らないって…。」

「そんな証拠…一体何処にあると言うのですか…。」

第一私達はこの街に来たばかりで

此処の人間達が
どういう奴らなのか…。

信頼得るまじ的
存在が

いるのかまだわからない…

信用するなんて…。

まだ早過ぎです……。」「

ローゼンメイデンにとって今や人間の存在ミィディアム以外は敵意として見なされている。そう簡単に人間を信用しようとしてもせざる終えない事は新羅自身も充分理解している。

女のコシヨコシヨ話って大抵くだらない事だから盗み聞きしてもそこまで価値は

「翠羽……………」

確かに貴方達の姉妹は人間達の手で消された。
そりゃ信用するなんて

人間は……………」

愚かだから…。

勿論私も…。

でもね…

万事屋（あの三人）だけは違かった。

普通の人間にも私にも無い 何か…」

そこで言葉を止める。

「何かって一体っあの人間達に何があるっていうのですか…？」

翠羽の問いに新羅は小さく首を振る。

「その“答”は

貴方自身が見つけないと意味がない。貴方がその

“答”を知った時貴方は

多分人間達と…」

「悪いけど……。

私はミーディウム以外の人間とは交流を深めようとも間柄を築きあげようとしたことはこれっぽっちもないです。ましてや此処のポリ公共とは仕事付き合いの為だけにああしてマヨラー共と話してるだけで…。正直なところ

人間なんて…。

ただの

ジャンク…。」

「翠羽！！！」

「！」

突然、新羅が大声で自分の名前を言ったものだから
ビクッ！！と肩を鳴らす。

「むやみやたらとその言葉を軽々しく口に出すなんて何度も言っただけだよ。」

ギロっと暖かみのない目で翠羽を睨む。その目を見た翠羽はまるで金縛りにでもあったかのように身体が硬直する。

「い」…

「ごめんなさいです…。」

頭を下げる

…と

フツと一瞬にして新羅の日常の顔に戻り

分かれれば良しっ！

そう発すると、すたすたと廊下を歩いていき

翠羽もすぐに自分の髪を櫛で解かし終わると新羅の後に続いてその背中を追うように早足する。

普段あまり長いと思った事がない廊下が何故か今では彼女を追ってるだけというのにとても長い感じがした。

—まるで

どどん新羅が

翠羽（自分）から存在が遠ざかっていくかのように。

そんな廊下を歩いていき、やっとの事で新羅に追いついたと思いきやふと立ち止まった為。

翠羽も歩く足を止める。

「どうしたですか…？新…」

「賭けをしましょう…！」振り返り、自分の頬の近くに人差し指を立てる。

「かっ…賭け…？」

思わず聞き返す。

「もし貴方がその“答”というものを見つけれたらその時は貴方の勝ちということでミーディウムとして私が貴方の……何だろうなあ……まあ単純に欲しいものいくつでも買ってあげる。

もしその“答”を見つけれなかった場合私の勝ちだから……

その時は……

貴方が私の言いなりになる！

どう賭けてみない」

「それ翠羽のほうがリスク高いじゃないですかっ！！それももし私が負けたら、逆の立場になるって冗談じゃないです！」

ミーディウム ローゼンメイデン
契約者より人形のほうが境遇が高いとでも言いたいのかその賭けに応じようとはしない様子

「私はそんな賭け絶対乗りませんから。」
ボソッと言葉を吐き

新羅の後方にいた翠羽は新羅の横を通り過ぎ観点を変える。

「ひっ……酷いっ！！」

顔だけ振り返ってみると両手で顔を隠しながら歎く新羅。

「私は…貴方の為を思つて
善い（よい）妙案を考案したというのに、
そんな簡単に拒絶するなんて…」

ウッウッ…

…と泣きまねを

してる事はお見通しなのであえてそこはツッコまず話を続ける。

「だから…というより新羅が考案した私だけリスクの高い賭けなん
ざ誰も受けないで…」

「だったら万事屋さん達に…本当の事言います。」

怪しく引き攣るその唇。

「何をです。」

「翠羽は蒼琉の双子の姉で実際気が強いけど
実はローゼンメイデン

第一ドールには魂削る程ホントは弱い人形で一度泣かされた事がある
って

ホラー系好きだなんだ言ってるけどそこまで怖くないホラー映画
を見たその5分後早々涙ぼろっぼろ流しながら私に抱き付いて来た
り…」

「…」

「後―“プロフィール”に書いてある翠羽の身長のことだけど161.

8cmって書いてあるけどあれはピンヒールブーツを履きながら背伸びした時の高さプラス

あのブーツ

「シークレットブーツ」ってやつで普通のブーツよりも踵の高さが10cm高いやつで実際翠羽がブーツを脱ぐと本当の身長が分かるんだよ。本当の身長は13……」

「だああああ！！！」

分かったあ分かったです！！！ 乗ります乗ります！

リスク高いのなんて糞くらえでその賭け乗ります！

だから言わないで下さいです！

そして早く巡回に行くです！」

「はいはい……」

便乗したため新羅の顔は笑みで溢れていた。

その顔を見てムスツと顔を蒸らせたまま背を向けると、ぶつぶつと文句を言いながら廊下を後にした。

その廊下に今いるのは

新羅一人――

その笑みから瞬間的に苦笑いに変わり、視線を三日月へと向けた。

「これがあんたの為なんだよ……。分かって……翠羽。」

三日月に語り掛けるように言うと

その後は

翠羽と共に巡回を始めた――

浪士共の

動きが見当たらなかった為

その日は早々と巡回を切り上げた。

新羅達はまだ知らない。

そら
宇宙から

一隻の 戦艦が

地球こくに向むかっつている事ことなんて…

女のコシヨコシヨ話って大抵くだらない事だから盗み聞きしてもそこまで価値は

銀）一隻の戦艦ー？

それって…？まさか……

悪の華こそ美しき棘（はな）（前書き）

あの男達の御登場です！！

悪の華こそ美しき棘（はな）

——それは遠い遠い銀河の果て——

光年まで続く宇宙そらには何千何万ものの星が光っては滅び光っては滅びの繰り返しをしていた。

どっちが前で後ろなのか
どっちが左なのか右なのか見回しても分からない宇宙そらからは
一隻の戦艦が地球こゝを目的まとし向かいつつある。

その

戦艦の外部には

あるマークが刻まれていた

『春雨』

―戦艦内部にて―

「また地球へか…ハァ元老も元老だね…。」

幾度もため息を付く長身大男 阿伏兎

「俺は楽しみだよ…またその“侍”って奴に会えるんだから
オレンジ色の髪を一本のおさげとして結ってあるは神楽の兄

神威

「けっ！呑気でいられて良いなああんたは…
すつとこどっこい！！」

「んで今回は何処に用事？やっぱり江戸…？」

「ああ…おまえさんの
大い好きな侍とかいう奴のいる江戸だよ…。」

「そっか…だったらより
一層楽しみだな…」

「おいおい…今回ばかりはおまえさんのお遊びに付き合ってらんないんだよ！」

「へえ…手厳しい。」

珍しくも真面目な顔をする阿伏兔に「ホ」の形を作る神威

「俺は何時だって真面目だよ!!」

それは失礼。

「まあいいさ…。おまえさんも上からの指示忘れちゃあるめえよ…。」

しばし黙り込み頭の中を探る神威

「ああー人探しとかの!」

「そうそ…その人探しの手掛かりになるのがこの写真だ。」

所々破けていたり血が付着した一枚の写真を神威に渡す。
写真に写る人物の顔見をし首を傾げる。

「…誰この女。」

「さあな…名は確か

園原 罹音

(そのはらりおん)とか言うらしい。」

「後の情報は?」

「何もないさ…手掛かりはこの写真と名だけ…後は適当に見つけて
こいつて上からの指示だ。全く人使い荒いよなあ…上も。」

ひょいっと神威から写真を取り上げる。

「こんな女さん^{アマ}を写真一枚でどうやって探せっていうのか。そしてなんで上はこの人間を必要としてるのか。」

「ふーん…まっ頑張ってる…」

「待てーい！今回ばかりは自分だけ楽しようなんざさせやしねえーよ」

アップ口にする。

「ええ…だってせっかく地球行くんだから侍とかいう奴と闘ってみたいし、最もは銀髪のお侍さんとだけど…。」

笑顔の裏の夜兎の本性。

「いいか？今回は俺達第七師団だけの搜索だ。情報網が少ない元^{もと}で探すのにだって時間はいつもの倍は欲しいところを短期間見つけ出せっての事だ。

耳かっぽじって知っておけ。」

「知ったから後は頑張れー！」適当に手をヒラヒラさせる。さすがにこのままではと悟り焦る阿伏兎

「分かった！分かった！事が終わったら帰還日まで空いた時間は思う存分アンタの好きにしていいいから！」「なら良いやつ！」
顔色が一瞬にして綻びる。ほんと気まぐれだよなこの団長も…

「……我が儘な上司だよ。ほんと。」再度重い溜息を零す。

「ああ…もう一つ情報があった。」

「？」

あまさん
「その女は

そこらへん無能な女じゃないらしい」

「てことはつまり…？」

「戦闘能力は有りな女だと聞いた。人斬りまではいかねえがな…？
まあ俺達ほどじゃないが…」

「へえ」

じゃあさ……聞くけど

その女

強いのか？」

「さあおまえさんの期待に応えられる保証はないぜ…」

興味津々に聞いてくる

団長に少々焼く。

心の中もため息の色で一色に染まる。

俺の血はその言葉を聞き 疼いた。

多分この女も血に飢えた哀れな兎――

こいつからは

同じ血の臭いがする。

俺の血は

何時^{いつ}渴きがとれるのだろうか？

銀髪の旦那と殺り合うまでは渴きがとれないと思ったけど

この女は

俺に

初めて

血を（俺を）騒がせてくれた

期待しても良いのかな？

期待の前に

愉

し

ま

せ

て

くれるのか？

血で血を潤させる。

そう

鮮血な血で

この女と――

――銀髪の旦那

どち^らが

血に 相^あ応^おしいの^かな？

悪の華こそ美しき棘（はな）（後書き）

いやあ

神威達ことごとくキャラ崩壊してるね（苦笑）

ファンの皆さん！

どうもすいまっせええん!!!!!!!!!!!!

たまには味方も敵も関係無いときだってある（前書き）

銀）久々の登場じゃね…？

神）そうアルな。どうせ作者の気分次第で出すか出さないか決まってるアルけどな！

銀）そーそ…

だからもしかすると今日で最後かもしれないぞ俺達の前書き、後書き出演は…。

神）まじアルか！…！

今日で最後アルか！

おい

「テスト前だつてのにシャーペン持つ気のない腰抜けやろー」…！！

亜麻音

はい…腰抜けやろーです。

神）出番無くていいから

酢昆布大量によこすネ…！

銀・亜麻音

そこかよ…！！…！！…！！

—END—

新) また僕出番なし……？

たまには味方も敵も関係無いときだってある

日の出が上がる。

日は山々の連なりから
ひよっこりと顔を出し

雀は鳴き

鶏は朝を告げ

犬は何度も欠伸をし

木々は揺らぐ。

そして

歌舞伎町は今日も賑わう

取り寄り爺さん婆さんは
起床が早く

颯爽と店のシャッターを開ける者や
ランニングスーツを
着こなし白い息を出しながら走る者

そんなある路地裏では

笠を被った長髪男が

新聞の記事を目を逸らさず直視していた。

男が見ている記事はデカデカと掲載されていた

「連続庶民殺人事件

裏表の顔の琲瑠袈」

と…。

「琲瑠袈が裏ではテロ活動…。なんとも…」

（だが事件解決はまだ早過ぎる。

琲瑠袈が真選組の手に殺られるのはまず確かだということは分かった。だが…

客が何故…）

「かゝつら♪」

朝っぱらからの威勢の良い勇ましき声。

振り返って見れば

「貴様！四番隊の…」

四番隊隊長…連沢新羅

ここに在り。

「神妙に尾縄に付きやがれ!!」

鞘から刀を取り出す

それと同時に桂も刀を手にとろうとした。

「なーんちゃって…」

…が 新羅は刀を鞘から半分まで出したところすぐに鞘に収める

「なーんちゃって!今日はアンタは捕まえないよ!話をしに来ただけ!」

Vサイン+ウィンクのおまけ付きに桂は「?」となる。

「もしかして貴方?

銀時に

「連続庶民殺人事件」教えたの…?」

意味深にも急に聞かれた事に状況が掴めなくなる。だが言葉の意味を知った上で

「何故俺が銀時に言った事を知っている?」
と答える。

「いや…攘夷戦争前からの旧友の仲だったら今でもその繋がりは切れてないだろうしね…。」

それに…」

言葉を切る

「俺の話を聞けっ！何故俺が銀時に言っ…」

「銀時はこの事件に深く関与してるってこと…。」

「！！」

「…何故銀時が…」 「あの人琲瑠袈の将官さんに依頼されたいのよ。家族を殺された…だから復讐がしたいって
だけど実際は琲瑠袈の仲間の仇を打つ為に銀時は利用された。

まあ、殺人事件とか呼ばれてるけど実態は異なる。 私は琲瑠袈を潰す為に動いたまで。まあ無理もないわよ。表の顔は一般って見做されてたから」

「動いた…まさかこの事件は貴様が…」

「まあそういう事ね…。」

殺人事件ではなく警察としての役目を果たしたまでだけ…」

「貴様…いや連沢新羅…。では銀時と接触してるのか？」

「ええ…かなり前から。」

相変わらず…

この街を謳歌してるわよね…。

白夜叉……」！！！！

目をカッと見開く。

「何故貴様がその名を……！」

「さあなんででしょうね？」

クスクスと不気味な微笑を浮かべる。

「でも一つ忠告しておくわ……」

白夜叉今は平凡な毎日送ってるけど

歌舞伎町にはまだあの男を狙う奴はゴロゴロいるって事は深く
その胸に刻んどいたほうがよろしいかと。

仲間が死んだら嫌でしょ？

いくら攘夷浪士の中でも

過激派と恐れられる

鬼兵隊当主

高杉晋助……。

貴方方にとっては今なお彼は

‘仲間’

だと思ってるんでしょ？

彼が死ぬ姿だって見たくはないでしょ……。」「き……貴様。一体……」

「かつて貴方達の

恩師 吉田松陽のように大切な人をまた失いたくなければ…」

カチャ―

再度刀に手をかけた。

「幕府の犬が何故俺達の恩師を知っているのかそんな事はどうでもいい。だが貴様が俺達を気に食わずして仲間に手を掛けるような真似をしようならば今この場で息のねを止める。」

穏和した面^{ツラ}で

新羅はまあまあと宥める。

「これは忠告よ…。ただの」

だがまた笑い出す。本当に不気味で文字通り

奇妙奇天烈。

「貴様はっ…一体何を知っている…!!」

「この世界の全て…!!…」

「…!!」

「とか有り得る訳ないじゃん…!!アツハハハハッ…」今のフレイズの何処に坪のはまり所がある。

自分の腹を抱えながら

目に涙を浮かべ

「これ傑作…」とか言葉零しながら、俺を嘲笑うかのような彼女の

目の前に立っている俺は一体どんな顔をすればいい？
しばらくして

目の前で爆笑している女は目に浮かべた涙を拭うとまた俺に

「今のは軽いジョーク…だから忘れ…プ…アハハハハハは…」

単なる馬鹿なのか

単なる阿呆なのか

今はそんな事はどうでもいい…。

ただ…。

「あゝ…

…新…あ…

新羅あゝ…

何処ですかー？」

桂達の居る路地裏の近辺から新羅にとって聞き慣れた声が入る。

「あ…忘れてた。」

朝の巡回の途中だったんだ…。」

ぽつりと言葉を吐くと

くるつと回り桂に背を向けじゃあねー言い歩みだす。

「おい待て！まだ話は…」

「近々（きんきん）気をつけなさい。って銀時に言っておいてもらえる？

狂乱の貴公子さん♪自分に置かれた境遇を良きものとして維持しておきたいのなら四六時中自分の回りに蜘蛛の糸を張りつけておいて、自分の身は鬼の皮でも被って（おおって）防御力を高めておいたらって…」

遠回しの言い方に何を的と言いたいのか…。

「？」も黙する。

「つまり…自分の身は自分で護れって言いたいわけ…。

今日の事は、
二人だけの秘密。
また会いましょう。

次会う時は

お互い 敵同士ってわけで。」

そのまま新羅は死角を曲がり巡回へと戻っていった。

一人路地裏

男は呟く。

「とにかく銀時のところに行くか…。」

そう言い 万事屋へ
向かう男の背中を

朝日は虚しさを抑え

乾いた空へと光を照らす。

秘密は後（のち）の噂となる（前書き）

銀）おせえよ。

新）ほんとに

神楽）…………。

亜）??

銀）何してた。
更新もろくにしねえで。

亜）あっあの…これには訳

銀）何!!!! してた?

亜）はいっ!!!! すみません!!!! サボってました! サボって遊んでました!!!! すみません!!!! まじですみませんでしたああああ!!!!

秘密は後（のち）の噂となる

「一体どういう事だ！！！！！」

「どういう事もこういう事ありやしねえよ……！」

説明した通りだろ……。

てめえ何回説明すれば気が済むんだ！！！！！」

怒り気味の溜め息を一つ零す。

話せば長い。

簡潔に言えば朝っぱらから勝手に人ん家あがってきて夢の世界にレツツ・パリーイしている人たたき起こして勝手に冷蔵庫漁って勝手にソファ―に座って説明がどうやこうや言われて勝手にキレて勝手に話が進んでいたらしい。

「てめえじゃない桂だ！！貴様の説明の仕方が悪いだけだ！！！！
琲瑠製の将官高梨とかいう奴に依頼された内容が家族の敵討ちだなんだでその依頼を請けた理由が、ジュラルミンケースにびっしりの一千万を貰ったからなどと軽いノリで受けた！！だがその金は偽金

!!!! しかもその男は家族じゃなく琲瑠袈の仲間の為の仇を打つ為だけに貴様を利用しただとお!!!!」

「だからさつきからそう言ってる…」

「何故それを俺に伝えなかった!!」

桂の怒鳴り声に小指を軽く耳の穴に入れ塞ぐ。

「……うつせえーなあ……んな一々てめえに報告してられる程暇人じゃねえんだよ!! 学校から帰ってきた子供に「今日はどうだったの? 楽しかった?」

とか聞く何処ぞのお母さんかつ! てめえは!!」

ベタな例えを桂に向かってそう早口で言うが、桂はその言葉を振り払うように

「っ貴様! 命が買われたも同然の事だろ!! 一歩間違えれば、貴様死んでいたんだぞ!!!! 今回の琲瑠袈事件は連沢新羅が犯人だったらしいが。」

「そうそ…あいつが…」

……

…ん?」

銀時は自分の耳を疑った。

(こいつ今連沢新羅って

言ったか?

なんで知ってる?)

この事件の犯人は
テレビでも新聞にも載っていなかったはず。」

「どうやら何故俺が琲瑠袈事件の犯人：すなわち
連沢新羅を知ってるのかと今思っただろ？」

「ヅラ：なんでそれを？」

「俺も聞きたいことがある。」

あの女は一体何者なんだ：？」銀時も問うが、逆に桂に問われてしまった。自分の問いが綺麗さっぱりスルーされハア：と息を漏らし仕方なく桂の問い何がだ？と聞く。

「貴様とあの女の関わりには首を突っ込みたくはないが
あの女に言われた。」

「貴様か？銀時に琲瑠袈事件を教えたの？」とな

新羅の口調とは少し舌が滑る話だが確かに新羅は桂にそう言った。

「あいつが：：：新羅がそう言ったのか？」

「ああ：貴様に教えた事は事実だが：何故あの女が？銀時お前が言ったのか？」

銀時は頭の奥深くまで：いや脳の奥深くまでそんな発言したか思い当たる形跡がないか回路を辿るが、

大体の事

「桂にカクカクシカジカ教えてもらったんだあ！」

「へえ、そうなんだあ！」

「じゃあ桂君に銀時に教えたの？ って言ってみるね」

「うんっ！！」

アハハあオホホお：

だのそんな呑気なハ●ジみたいなのは普通銀魂の主人公はしない。
事実上回路を辿ったもののそんな事を新羅に告げた覚えはない。

「いやもういい：キャラ崩れる。」

なら貴様はあの女に言っていないと？」

「逆に言う理由がわからない。」

「確かに：それと銀時。あの女が言ってたのだが近々気をつけろ：
などのことをお前に伝えろと言われた」

「近々気を付けろ：？ 何にだ？」

眉間にしわを寄せながら、桂に問う。

「さあ…何にかは知らないが…あの女…何故か松陽先生の事を知っていた。」

「!!!!」

銀時は驚きのあまり目を丸くさせた。

「なんで…あいつが…」

「俺もそこまでは問わなかった。」

「あいつ…俺達と同じ塾通ってたか？」

「いや…仮にそうだったとしたらあんな性悪女俺は

嫌と言うほど目に焼き付いてるはず。

第一見た目からしてまだ未熟だ。歳は…そうだな…。まだ二十歳いっていないのではないか？

それなら話の筋交いはまずない。

俺達があの子と接触を交わすなどまず不可能…」

「………」

言われて見ればそうかもな…」

そこで一旦話は終わる。

銀時と桂は

あの子のこと…連沢新羅のことについてそれぞれの真理を築こうと能動した。

桂は勿論のこと、連沢新羅の事だけに脳を専念させた。

だがある男だけは違う。

銀時は――

奥平翠羽……いや

翠星石と蒼星石が

「薔薇乙女

（ローゼンメイデン）」が

そこに関係しているのではないか――と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4957x/>

薔薇獄少女

2011年12月29日01時48分発行